

31
602



始



2/20/14

3/-602



島崎藤村
徳田秋聲
徳田秋聲
田山花袋

大正
修編
11. 2. 18
内交

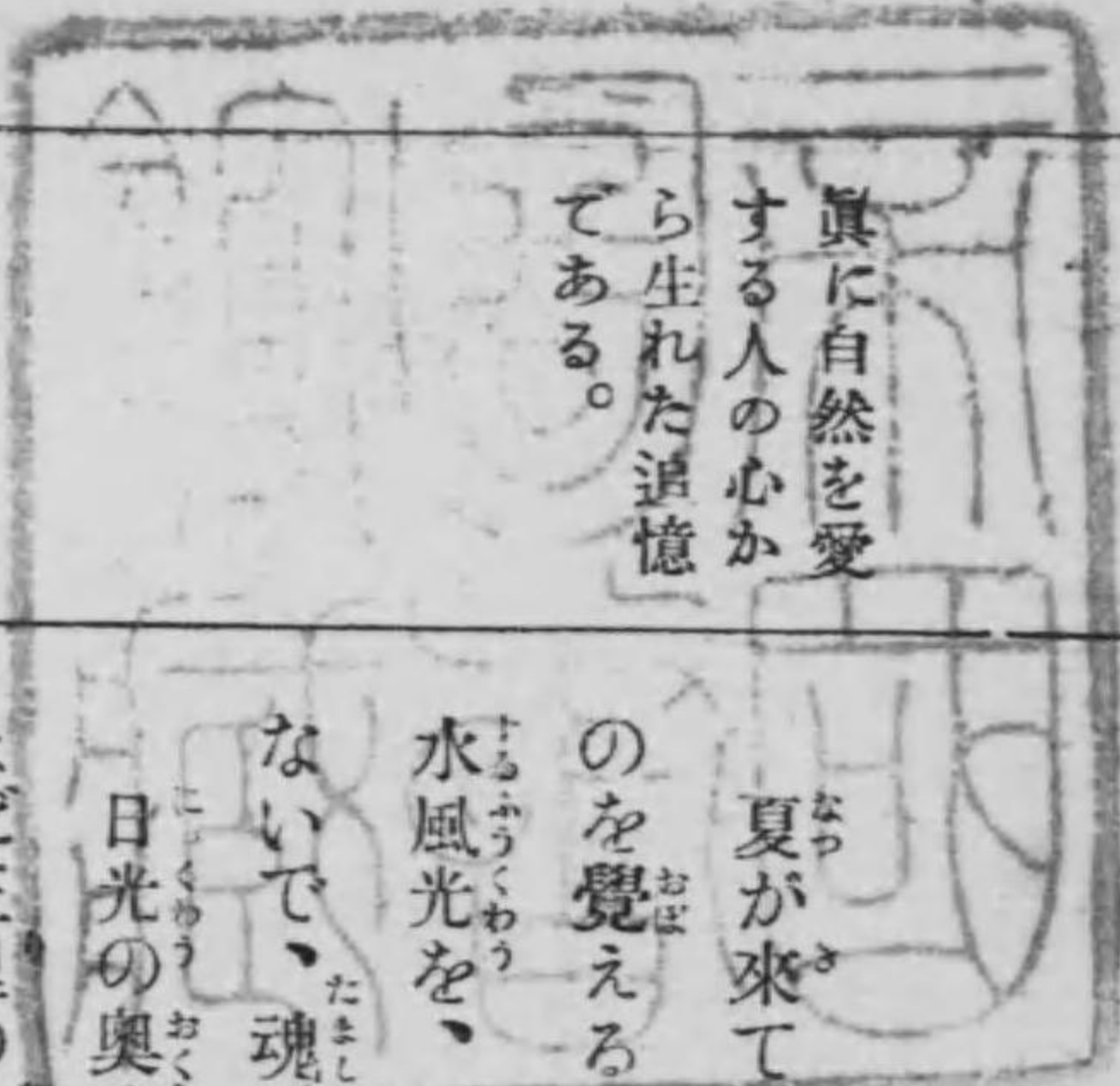
自然と人生叢書
(10)

煙霞

目次

箱根の山々	一
秋の駒ヶ岳	三五
春雨日記	四三
高野山奥の院	五四
蘆の湯日誌	五八
箱根山を流す新内	六九
女人堂	八一

目次



眞に自然を愛する人の心から生れた追憶である。

箱根の山々

夏が来て、また山の地方を懐かしむ感情が自然に私の胸に滲んでくるのを覚える。何さいつても山を樂むのは夏のこころである。曾遊の夏の山水風光を、かうして今都會の中に入れて追憶して見るさへ懐かしさに堪へないで、魂飛び神往くの思ひがするのである。

日光の奥中禪寺湖の短艇の上で遠く仰望した男體山の雄姿。そこからまだ三里の山奥を辿つて入つていつた湯の湖の畔、自然がいかなる妙技を以つて作り成したかと思はれる人工その物の如き庭園の草樹を分けて流れる潺流の美、盛夏八月既に秋冷を感じる湯元の浴舎の座敷から眞青な夏草に被はれた前白根の清らかな色を眺めた時、又はその前白根の突

目次

高野山から……………八六

野峯日記……………九五

山……………一〇一

伊賀伊勢路……………一一三

大和路……………一二〇

添乳物語……………一二五

冬の日かけ……………一四五

順禮歌……………一五三

吉野路……………一六八

自然は人間を
威壓する。

兀たる頂邊に夕月の輝きそめる宵、晩涼に乗じて古い神話の中にでもありさうな幽暗なる湯の湖の水の上に輕舟を操りながら、まるで魔界の巨人の如き男體山の肩背の桔梗色に黄昏れてゆくその崇嚴な美に見惚れた時、いづれか私の自然に對する感情を騒がさしめぬものはない。けれどその美しい日光の山の形水の色も、私の弱い心には往々にして唯美しいといふよりは寧ろ不可思議な、そして怖い自然となつて威壓を加へるかのごとき映ずることがある。それに比べると箱根は、日光のごとき崇美の感じには乏しいけれど一層の安らかさ穩かさを感じる。靜に心を落着け、病弱の體を休息せしめようとするには箱根の方が好ましい。

私は去年の夏の半ばから秋の初めへかけて二た月ばかり箱根にいつてゐた時分のことを今そゞろに想ひ起してゐる。その年は六月の末からかけて七月一ぱい八月の初十日ごろまで息をも次がせぬほどの炎暑で、東

温泉の町の情
景が渾然とし
た筆致で描か
れてゐる。

京などでは屋敷の隅に生えた桃の若木のやうな草木などはあまりの日照りに枯死してしまふ有様であつた。私はその八月の十日に立つて箱根にいつた。私がゆく二三日して、がらり天候が一變して、連日駿河灣の方から箱根山麓を越して吹いて來る西南の風は涼しいといふよりも寒いほどの雨氣を含んでゐた。殊に私の滞在してゐる海拔二千五百尺の蘆の湯のあるところは、すぐ浴舎の後に聳え立つ駒ヶ岳と双子山との峽になつてゐるので、蘆の湯から双子山の麓を巡つて元箱根の町のある方に降りてゆく一筋の坦道、鶯坂をいつて八月の半ばまで箱根竹の叢藪の中で一日鶯の鳴きしきつてゐる、坂のあるあたりは蘆の湖の水を含んだ冷たい雨風が顔をも向けられないやうに強く吹いてゐた。湯疲れのした湯治客などが毎日の雨天に球突にも碁や將碁にも飽いて、浴衣のうへに貸し襦袢を重ねて番傘を翳しながら其處らを退屈さうにぶら／＼歩いてゐた

りするのを見掛けるが、彼等は少し歩くに詰らないので、すぐ引返へしてしまふ。そこになるに日本人に比べて西洋人は男も女も實に感心するほど勇ましく活潑である、彼等は雨が降らうが何が降らうが第一着物がすつかり防水の用意が出来てゐるので雨天には雨天の身装をして晴天と同じやうに一日も缺かさず運動をする。彼等は病人か何かでない限り温泉はなくとも多く蘆の湖畔に避暑してゐる。そして定つて毎日そこら中の山道を跋涉する、私が散歩してゐるに毎時よく見る其ある二三人づれの婦人など、これも縹緞は好くない女達であつたが靴の上に草鞋を穿いて雨中の山道を歩いてゆくのがあつた。さうかするに夜道を湖水まで歸つてゆくので懇意な店屋に寄つて、店頭から、

『提燈々々。』と呼ぶ。

するに世辭のいゝ、その内儀や娘は尻輕に立ち上つて、

西洋人を點出したところ、その描寫、拍案に價する。

『奥様、まあお遅くから。これからお歸りになるのは大變ですなえ。』

なごみ云ひつゝ、手早く大きな文字で屋號を記した提燈を取つて蠟燭に火を點しながら渡すに、

『おゝ、大變々々。ありがたう。』

なごみアクセントの違つた日本語を店頭に残しておいて歸つてゆく。その時分からすつに九月の末まで五十日ばかりの間雨天の日の方が多かつた山の上でも、偶には清い初秋の風が習々高原の草原を吹いてゆくやうな美しい日に出會ふことがあつた。この模様なら明日もまた雨であらうとおもつてゐて翌朝起きてみるに陰晴定めない高い山の上は相模灘の方から朦々として湧き上つて來る白い水蒸氣に峯も溪も人家も埋つてしまひ、わづかに大空の真中のところが少許明るい日光を洩してゐるばかりである。さういふ日は山の上の天氣も今日は好晴であるここに

分る。その水蒸氣の湧くのを見てゐるのも夏の高山生活の一興である。蘆の湯は箱根七湯の中でも最も高い位地にある。その爲め蘆の湖から吹き送る濕氣が多くていけないなごいふ者もあるが、併しその相模灘から湧き上つてくる水蒸氣が刻々千變萬化の奇趣妙景を盡しつゝやがて雲となり溪を埋め、峯を這ひ大空を蔽うてゆく有様を見ようこそすれば蘆の湯に足を返めてゐなければならぬ。それは蘆の湯のある處が箱根山麓中の最も展望に都合の好い位地にあるからだ。蘆の湯から一里ばかり下の中腹にある小涌谷や底倉、宮の下などは旅館も完備してゐて入湯するには何斯が便利ではあるが散歩はいつも溪の底の單調な一筋道に限られてゐる。そこから仰ぐ明星ヶ岳、明神岳の眞青な夏の姿も美しくない。こゝはないが眼界は上の方に比べてひびく狭められてゐる。小涌谷まで登る。こ眺望は底倉あたりよりは遙に遠く展けてくる。けれども、蘆の湯附近

白銀の蛇の宛れるごとき形容の適切にして、感覺的なことよ。

の峯々の、相模灘の煙波を遠く眺めうる形勝の地勢に比ぶべくもない。國府津、大磯から江の島につゞく津々浦々に打寄する波頭は丁度白銀の蛇の宛れるごとく、靜に眸を澄す。三浦半島の長嘴は淡藍色の影を遠く雲煙漂渺の境に曳き、その尖端海に没する。こころ、あるかなきかの青螺のごとく微に水に浮んで見えるのは三浦半島の城ヶ島である。蘆の湯はちよつこ其處らの小山に登つてもそんなに展望の利くところにあるから、ごちらにゆくにも道は四方八方に通じてゐて窮するところがない。日に幾臺となく自動車の馳走する九十九折せる坦道を小涌谷の方へ降りてゆく順路に沿うて歩いてゆく。こ道の右方にあたつて舊東海道を通ずる古い大溪谷の眺望が深く抉つたやうに展望される。私はその緩い勾配をなしてゐる往還に櫻木の杖を曳きながら宛然大きな生物が口を開けたやうな溪谷を眺めるのが好きである。そこから見る。こ双子山が

著者の自然描
寫は巧を越し
て真に迫つて
ゐる。

一入雄偉な容姿に見える上双子と下双子とが須雲川の深い溪谷にまで長
く裾を曳いてゐるのも何さなく壯大な感を起さしめる。好晴の日に相模
灘から湧いて來る水蒸氣が、小田原口から早川の溪を眼がけて押寄せ、湯
本から二派に分れて一團は早川の溪を埋め、明星ヶ岳、明神ヶ岳の峯を
這ひつゝ次第に西北に進んで宮城野の村を深い霧の底に沈め、金時山か
ら足柄峠、長尾峠に向つて長驅する。私は、いつもそれを蘆の湯の笛塚山
に登つて觀測する。そして一派は、天氣の好い日であると須雲川の溪を
埋めつゝ、舊東海道に沿うて軍を進め、聖ヶ岳と鷹の巢山との中腹を掩
ひ双子山の裾を這ひ、肩を隠し倍々奔騰して蘆の湯の空を渡り、駒ヶ岳
神山に向つて突進する。それが雨後の濕つた天氣の日であるこ、白い雲
霧は丁度深い水の底に澄んでゐる真鯉の背の如き濃藍色をした聖ヶ岳の
中腹を靜に搖曳してゐる。

落日の悲壯美
それが神秘の
色さへ浮べる
といふ著者は
自然の精神に
没入してゐる
人間の尊い境
地だ。

夕陽が駒ヶ岳の彼方に沈んでゆく頃の山々の美しさといふ者はない。
駒ヶ岳は灰白色の雲霧に隠れてしまつて、日頃の懐しい姿はまごにある
かさへ分らない。太陽も雲嵐の奥に影を没して、たゞ僅に微薄の白光を
洩してゐるので、あのあたりにゐるといふことを思ふばかりである。そ
して、ところどころ煙霧の稀薄になつたまごころに、まるで無數の金粉を
播き散らしたやうな夕映えが水蒸氣になつて煙り、日の射さない處は凝
乎と不動の姿勢でゐるかと思はれるやうな雲霧もその實非常な急速力で
盛に渦巻きつゝ奔騰をつゞけてゐるのであることが分る。さうして稍々
暫く見詰めてゐるうちに、さうかするこ深い雲霧の中から山の一角を微
に顯はすこごがある。その時の駒ヶ岳は平世好晴の日に仰ぐ駒ヶ岳とは
全く違つた非常な神秘なものやうに思はれることがある。
それに反して好く晴れた日の駒ヶ岳は清楚な感じがある。笛塚山また

は稍々遠く離れて鷹巢山あたりから眺めると薄や苧萱なぎの夏草に掩はれた真青な單色を遮ぎる一本もない、大きなヘルメットの如き圓い山の膚に丁度編靴の紐のやうな九十九折りせる山徑が裾から頂上まで通じてゐて、眞白い服装をした西洋人の男女がそこを登つてゆくのが小さく認められる。蘆の湯から頂上まで一里半。婦人や子供でも午前中に行つて來られる。少しの危険のない、優しい山である。そこに登ると展望は更に大きい。富士山は手に取るやうにすぐ西北の空に聳つてゐる。眼の下には蘆の湖の水が碧く湛へてゐる。が、駒ヶ岳は東に向いた方を小涌谷から登つて來る道から眺めたよりも、蘆の湯から双子山の裾をめぐつて蘆の湖の方におりてゆくその途上より仰ぐのが最も優れてゐる。丁度蘆の湖の東岸に沿つて長く裾を曳いてゐるその傾斜が今歩いてゐる往還のころまで緩い傾斜の一線を引いてゐる。好く晴れた日でも紗のやうな輕

い浮雲を頂邊に着けてゐることがある。少し曇り勝ちの日だと直ぐ雲霧に被れて蘆の湖から湧き上る水蒸氣が丁度腰から肩のあたりを疾風のごとき勢で双子山との峽の方に吹いて通る。その往還から見晴しの茶屋あたりまでのところから仰いだ駒ヶ岳は何とも云へない懐しい姿である。私はその駒ヶ岳を最も好む。駒ヶ岳の、さうであるのに反して、その邊から眺めた双子山の南に面したところは、何もなく人を脅すやうな感じを與へる。往還から舊東海道の方に向つて深い溪になつてゐて、双子山の裾は美しい一線を長くその方に曳いてゐる。そして一面海をもつて蔽はれた山膚の處々に凄じい焦黒色をした太古の火山岩が磊々として轉がつてゐて、中には今にも頭のうへから落ちかゝつて來さうな形をしてゐる。そこから仰いだ双子山はたゞ何もなく憂鬱な恐怖の感に満ちた山である。昔の所謂箱根八里の峠を越して往來をした旅人の眼にはきつゝ最も強い

印象を残した山であつたにちがひない。見晴しの茶屋から、幾曲りかせる新道のだら／＼坂を元箱根の方に降りていつて、舊街道に沿うた湖畔の八町の杉並木を通り越し、箱根町のころから振顧つて眺めた双子山の形も亦た印象の深い容をしてゐる。私は蘆の湯からいつもの櫻のステッキを曳きながら一里ばかりの道を湖水の方に散歩して、そのローマンチックな突兀とした双子山の山容を仰ぎ眺めることを楽しみにしてゐた。湖水の享樂は限りがないが、私な去年の秋一度箱根町から塔ヶ島の離宮の傍をめぐつて元箱根まで僅かの距離を舟に乗つたことがあつた。嘗ては宮の下から大地獄の方を巡つて湖尻から舟に乗り駒ヶ岳を仰ぎながら箱根町に着いたころがあつたが、それはもう今から十二三年も昔のこととて、明瞭な印象が残つてゐないが、去年の時くらゐ湖水の色を美しいと思つたことはない。それは避暑の客も大方退散した九月の十八日であ

つた。毎日降りつゞく秋雨に一日湯に入るのこ部屋の中に閉籠つてゐるのに倦み果て、山の上の人々は頻りに天日の輝きを望んでゐた。するとその日になつて空はめづらしく晴れ、拭うたやうな碧空は瑠璃の如く清く輝き、ところ／＼に紗のやうな薄い白雲が漾うてゐるばかり、夏の頃の重く濕つた風もちがひ、爽やかな軽い初秋の風が習々と軽いセルの袖を吹いた。九月になつてからはその方には長く降りてゆかなかつたので、私はあまりの好い天氣に浮かれたやうな心地になつて櫻のステッキを曳きながらぶら／＼と歩いていつた。そしていつもの八町の杉並木を通り抜けて舊關所の趾から箱根町の方へといつた。そこらからが双子山の突兀とした容を仰ぐに最もよい。私は双子山を眺めながら箱根町を歩いてみた。日本人の浴客が八月一ぱいで殆ど退き揚げていつてからも西洋人は九月の十日頃まではこの湖畔に残つてゐるのであるが、それすらもう殆ど全

部山を降りてしまつて眞夏の頃の賑かさはなくなつて、湖水の上にも舟の影は絶えてゐる。私は、ふと歸途は舟で元箱根までかへつてみる氣になつて、船頭を呼んだ。船頭は、この間からの雨で、もう舟なごに乗る客はないだらうと云つて舟は悉く水涯から遠く砂の上に曳き揚げてあつたのを、夫婦がよりで丸太棒を轉がして水に浮べた。薙毛布を保持つて来て坐るところを設けてくれた。私は、近いところだからそれには及ばぬと辭退しつゝ舟に乗つて横木のうへに腰を掛け、舟が漸次沖の方へ滑つてゆくにつれて四圍の風景を願望してゐた。夏の頃ごちがつて湖のうへは遠く澄み、駒ヶ岳の裾を吹き下して來る風はもう冷いほぎ強く肌に沁みた。塔ヶ島の水際に續いた洒落れ石を洗つてゐる水の色も先達で中ごはちがつて、ひびく秋寂びてゐる。駒ヶ岳の裾はそのあたりの湖の上から眺めるのが最もよい。その長く引いた裾根か蘆の湖の水に達かうごす

る稍平な處に、岩崎男爵家のコッチージ風の別荘がある。丁度スチユヂオなごの繪畫雜誌で見る如きピクチュアエスクな家造りで、初め、あれが岩崎男爵家の別荘と聞いた時には、すぐ吾々の平生の心の習慣から富豪の獨占を嫉み憤る念がちよいと頭を擡げかけたけれど、それも仕方がないと稍々諦め心地になりつゝ尙ほ凝乎と眺めてゐるご、もしそのコッチージがなかつたならば、荒寥として見えるべき裾根の風景が、寧ろそれあるがために自然の景致に一點の情味を加へて、却つて親しみのあるものを感じられて來るのである。其等の風光に見惚れてゐるうちに舟はいつの間にか塔ヶ島の鼻をめぐつて元箱根から八町の杉並木を一眸に見渡されるところに進んできた。私はその時見たくらゐの杉の色の美しさを未だ嘗て見たことがなかつた。日光の東照宮山内の杉の色も美しさも忘れるごごが出来ぬのであるが、しかしその時湖の上からある距離を置いて遠

八月の末になるに駒ヶ岳神山の裾から笛塚山、蓬萊山にかけて見る限り一面の茅原が可愛い淡紅の薄の穂を抽きそめる。それにまじつて女郎花、兜菊、野菊、米蓼、萩なきが黄紫とりくの色彩を添へる。去年蘆の湯にゐる間私の最も多く散歩した處は前いつたやうに双子山の麓を通つて蘆の湖へ降りてゆく新道、蘆の湯から舊道の辨天山の下を通つて池尻に降り茶屋の前で一度新道に出て、それから新道に即いたり離れたりしながら翠緑鮮かな松林の中を穿つて通じてゐる舊道の細徑を傳つて小涌谷に達する間。それから鷹巣山、笛塚山なきへもよく上つていつた。松林の中を分けて舊道を小涌谷の方に歩いて來ると、もうそこら中に女郎花が點々黄色い花をつけてゐる。湯の宿にも客はめつきり減り、道を歩いてゐる人影も眞夏の頃と違ひ甚だ稀に、一山間として、氣爽かに、心自から澄み、神呀えて何を思うてみても、それが何處までとも深くふ

かく考へることが出来る。東京にゐるたならば僅かに四町か五町の道を歩いても脚よりも先づ神經の方が四圍の物のために疲れを感じるのに、山の中では嘗てそんな憂ひはない。私は例の櫻のステッキを杖つきながら、松林から吐き出す強いオゾンの香を認か呼吸しつゝ細徑を穿つて歩いてゆく、段々下へゆくとつれて、今まで自分と同じ高さにあるた笛塚山、鷹巣山は次第に高たかくなり、近くから見ると平凡であつた山の形もそれとよにも何かしら尊い威容を備へて頭の上から臨んでゐる。笛塚山は後三年の役に、新羅三郎義光が、兄の義家が清原武衡と戦ひ利あらざるを聞き、己の官職を辭して遠く奥州の地に赴き援けんとする時、義光が笙の師豊原時元の子時秋が、乃父の秘曲を傳へてゐる義光の後を追うて足柄山に到り、一夜明月の下に山上に楯を布いて坐し、笙を吹奏して秘曲を授かつた。その古跡として傳へられてゐるところである。果してその笛

塚山が楯を布いた跡かぎうかは知らないが、笛塚といはれてゐる處には大きな岩石が重なり合つてゐて、上が三疊敷ぐらゐに平つたくなつてゐる。私は苜蓿の穂波をわけて雲霧の美しい好晴の日には必ずそこまで登つていつた。鷹巢山は昔し小田原北條氏の出城のあつた跡と云ひつたへられてゐる。白茅ばかりおひ茂つたその山の背を淺間山、城山、湯坂山と、どこまでも傳うてゆくと一里半ばかりで徑は獨りで湯本まで通じてゐる。湯本から蘆の湯に達するにはこの道を往くのが最も捷徑である。これは湯坂道といつて、昔の間道である。秋晴の日なごに展望を恣にしようと思ふなら、その峯を傳うてゆくに越したことはない。湯本から順路を宮の下に取つてゆくと、溪ばかりを往くことになつて眺望が利かない。然るに鷹巢山の背を歩いてゆくと、殆ど箱根山麓の全景を双眸に集めることができる。

それから前いつた道に戻つて小湧谷におりてゆく臺の茶屋から小湧谷の平、二の平、強羅の平を越して遠く明神岳に溪の底に群つてゐる宮城野の村を見下ろしたのも懐かしい。池尻か、臺の茶屋に熄ひながら初秋の冷涼そのものゝ如き梨の汁を啜りつゝ、すぐ肩の上に聳つ鷹巢山と峯つづきなる宮の下の淺間山と二の平と強羅の傾斜との彼方に早川の溪が扶つたやうに深く掘れてゐる。その上に明神岳は屏々として、濃藍色に暮れてゆかうとしてゐる。明日の晴を報ずる白い雲の千切れが刻々晒色に夕映えてゐる碧空に向つて飄々として上騰し、金時山、足柄山の方に進んでゆく、池尻の茶屋の老婆は

『毎日々々よく降りましたが、明日はさうやらお天気らしいでございます。雲の具合が大變よろしいございます。』といふ。

さういふ言葉にはもう何十年の昔しからこの山に住み馴れた経験から

塚山が楯を布いた跡かぎうかは知らないが、笛塚といはれてゐる處には大きな岩石が重なり合つてゐて、上が三疊敷ぐらゐに平つたくなつてゐる。私は荊萱の穂波をわけて雲霧の美しい好晴の日には必ずそこまで登つていつた。鷹巢山は昔し小田原北條氏の出城のあつた跡と云ひつたへられてゐる。白茅ばかりおひ茂つたその山の背を淺間山、城山、湯坂山と、どこまでも傳うてゆくと一里半ばかりで徑は獨りで湯本まで通じてゐる。湯本から蘆の湯に達するにはこの道を往くのが最も捷徑である。これは湯坂道といつて、昔の間道である。秋晴の日なきに展望を恣にしようと思ふなら、その峯を傳うてゆくに越したことはない。湯本から順路を宮の下に取つてゆくと、溪ばかりを往くことになつて眺望が利かない。然るに鷹巢山の背を歩いてゆくと、殆ど箱根山麓の全景を双眸に集めることができる。

それから前いつた道に戻つて小湧谷におりてゆく臺の茶屋から小湧谷の平、二の平、強羅の平を越して遠く明神岳に溪の底に群つてゐる宮城野の村を見下ろしたのも懐かしい。池尻か、臺の茶屋に熄ひながら初秋の冷涼そのものゝ如き梨の汁を啜りつゝ、すぐ眉の上に聳つ鷹巢山と峯つづきなる宮の下の淺間山と二の平と強羅の傾斜との彼方に早川の溪が扶つたやうに深く掘れてゐる。その上に明神岳は屏々として、濃藍色に暮れてゆかうとしてゐる。明日の晴を報する白い雲の千切れが刻々晒色に夕映えてゐる碧空に向つて飄々として上騰し、金時山、足柄山の方に進んでゆく、池尻の茶屋の老婆は

『毎日々々よく降りましたが、明日はごうやらお天気らしいでございます。雲の具合が大變よろしうございます。』といふ。

さういふ言葉にはもう何十年の昔しからこの山に住み馴れた經驗から

人家の灯を眺めて、そこに可憐な人間のゐることを興味ある眼で見つゐる。

雲の動静や暮れゆく山の色、空の夕焼の模様で天候を卜する知識を得てゐるらしい。

『あゝ、あの雲はお天気らしい雲だねえ。』

『左様でございますよ。あの雲が明神岳のところをあゝ西へ上つてゆくと明日はお天気がよろしうございます。』

そんな話を交はしてゐるうちにも山は黒く静に暮色に包まれてゆく。それとゞもにすぐ眼の下の小涌谷あたりに丁度夏の宵の星くづを数へるやうに彼方にも此方にも燈火が瞬きをしはじめる。一番遠くの谷の底に暮靄の中に微かに見えてゐるのは宮城野の人家の灯である。吾々がたゞ見てさへ懐かしい。況してその村から、家にゐれば氣まゝにしてゐられる親の傍をはなれて、蘆の湯や小涌谷邊りの旅館に奉公をしてゐる村の娘等が、山の上から遠くの溪の底に親里の團樂の灯を眺めて胸を擇る如に

懐しがるのも無理はない。東京や横濱さへも知らず、中には小田原あたりへさへ、生れて一度か二度しか活動寫眞の芝居を観にいつたとなげくから、生れてから死ぬる迄一生山の中を降りてゆかず、明神岳の麓から朝に夕に駒ヶ岳や早雲山にかゝる雲を眺めて暮らす彼女等にとつては、わづか一里にも足らぬ山の上に来てゐながら親里が死ぬほご戀しいのである。夏場の急がしい最中を働くミ、八月の末にはもう暇をもらつて歸つてゆくことばかりを考へてゐる。そして容の減つてゆくにつれて彼等も一人づゝ下つてゆく。

山は静かに暮れていつた。冷いくらゐるの涼味は茶屋が軒先の笥の水から湧いて、清水に涵した梨の味にも秋はもう深かつた。私はそこから遠い新道を迂回するか、或はすぐその庭先から急阪を攀ちて辨天山の脇の舊道を登つて歸つて来る。尾花が長く穂を抽いて道の兩脇から夕暗の

中に微白く揺いでゐる。部屋にかへつて、手拭をさけて浴室へおりてゆくと懐かしい硫黄の香が鼻を衝いてくる。人によつてはこの硫黄の香をひどく嫌ふ者があるが、私にはそれが何とも云へずなつかしい。朝目覚めて楊枝を啣へて浴室に入つてゆく時、昨夜の夢の名残りを洗ひ清め、夜遅くまで静に讀書なごしてこれから寢に就かうとする時は、自から安かな眠を誘ふ。……さうして私は湯に浴つて散歩の軽い疲れを醫するるのである。

あまり遠くへ散歩をすると心地よく疲れて、書き物をする前に眠くなつてしまふことがあるので、筆を執つてゐる間はなるべく近い山の上を歩いてゐた。さういふ時にはいつも辨天山へ上つていつた。山が雨のあとで静に濕つてゐながら水蒸氣のないといふやうな日には殊に遠くの山の色が濃く美しくなつて見えた。明星岳、明神岳の上に尙ほ遠く高く

見えてゐるのは足柄、愛甲諸郡につゞく北相模の山々である。ヘルメツト形の大山も見える。好く晴れた日の下には其等の山々が遠近になつて濃淡を劃し、丁度品質の良いインキを溶かして塗つたやうである。横山大觀の雲去來でも寺崎廣業の白馬八題でもこの眞景の秋山雨後には到底企て及ばない。

八月の末をも待たないで大抵の浴客は、家族を連れた多勢の客でも、東京や横濱の繁華な都會から來てゐては三十日もゐると山の眺め、温泉の香にも飽いてしまつて、まだ残暑の劇しい八月の二十日頃にぞろ／＼行李をしまつて降りていつてしまふ。いつた當座は、百に近い部屋がいつでも満員で、私は広い庭を隔つた遠くの離家に、東京の某中學校の校長なる老紳士と室を隣して起臥してゐたが、やがてその老紳士も歸つてゆき、ほかの部屋も段々明いてきたので、私は受持ちの女中が寂しがるの

著者の人格が
羅如としてゐ
る。

を察して本館に近い別館の一室に移つた。其處は今までよりも一層心の落着くところであつた。長い夏の間、東京にゐて極度に疲勞してゐた私の神経衰弱もそこにある間にだん／＼元氣を回復して來た。始終不眠症に悩まされてゐたのが。山上の空氣の清澄なると適度の散歩と温泉の效果とのために熟睡を得られるやうになつた。大きな建て物の長い廊下を幾曲りかした果ての座敷に連日孤座してゐる私を見て、かゝりの女中は、御飯の給侍に來た時、

『旦那、お寂しくはないんですか。ひこりほつんとして。』

といつて、氣の毒さうな眼をして私の顔を眺める。

『いや、ちつとも寂しくはない。』

といつて笑ふ。しかしその微笑には深い寂寞を湛へてゐたこととおもふけれども、その寂しみは私の好んで選んでゐる境地なのである。隣の部

屋や廊下に登音や話聲がせぬので私は伽藍のやうな大きな建て物をわがものゝ如く獨占していつまでも朝寢をすることが出来る。

九月の七八日頃、二三日後に二百二十日を控へるので何となく戸外はざわめいて、駒ヶ岳や双子山にかゝつてゐる水蒸氣は疾風の如く飛んでゐるけれど、日は黄色く照り、庭前の杉や楓は風に揺れながら涼しい蔭を地に印してゐる。私はめづらしく隙間を洩れてくる日光が條文をなして白いものに包まれた軽い夜着に射しかゝるのを知りながら、いつまでも快い夢を食つてゐた。やがて懐かしい湯の香のそこはかとなく立ち香るのを嗅ぎ潔く起き上つて、戸袋に近い雨戸を二三枚繰ると、私の長寢をするのを知つてゐて、遠く庭の彼方に見える折曲つた廊下の先の部屋にゐて蒲團の綿を入れてゐるお秋といふ三十ばかりの質樸な女中は、雨戸の音に私の起き出たのを知つて、ふとこちらを見る。そして私が揚

枝を脚へて浴室に入つてゐる間にお秋さんはちやんと床を上げ、座敷を掃き清め、お茶を煎れて飲むばかりにしてある。私は静かな心持ちになつて香ばしい番茶を啜つてゐると、そこへ彼女は味の好い焼きパンに甘いバターを付けたのを運んでくる。それが何ともいへず甘い。その時分であつた。ある朝のこと、まだ床の中に眼覺めたまゝでゐると、向うの双子山の麓のところ、山を崩して地ならしをしてゐる、岩を擡ぐ鐵槌の音が静かに山に反響してゐるのが長閑に枕にひびいて来る。私はその音に夢の名残りから綺麗に覺まされる。その頃であつた。私は駒ヶ岳に登つて見た。駒ヶ岳は前いつたごとく優しい、婦女子でも踏破することのできる山上公園中の主峯である。十五六の小娘なごが二三人で四千五百尺の駒ヶ岳や四千七百尺の神山なごへ午前に登つて来て、十分自分の健康を満足せしむるやうな雄々しい運動をしてゐた。私は炎暑のために衰弱

し切つた體を物憂さうに持扱ひながら、僅に温泉の附近の山道を散歩してゐると、眞青な白茅に蔽はれた駒ヶ岳の背を九十九折りの山徑を傳うて登つてゆく人の姿が數へられる。私はそんなに其等の人の健康を羨んで見てゐたか知れなかつた。私も早く初秋の風が山の背を渡る頃を待つて身内に元氣が回復して来たならば、少女でさへあゝして登つてゐる駒ヶ岳の頂を一度は是非とも踏んで見たいものである。蘆の湯五十日の逗留の間そこらの山道といふ山道は殆ど残る隈なく歩いてみた。たゞ一つ残るのは駒ヶ岳である。

その日は朝の内は少しく二百二十日前の風が荒れてゐた。けれど清い秋の日は朗かに照り、浴舎のすぐ背に聳えてゐる寶藏岳の木々は細い梢の尖までも數へられる程に大氣は澄んで、黄金色の日光が其等の青い葉々に透きとほるやうに美しく漲つてゐる。天地渾然として瑠璃玉の如

く輝いてゐる。駒ヶ岳にも今日は風に吹き拂はれてか、めづらしく雲霧がかゝつてゐない。それに自分は一昨日までに書く物も一段落を告げてこゝ二三日は頭を休め、放心したやうになつて居ようとおもつてゐる時である。よく晴れた日には書く物に精神を勞してゐる、休養してゐる時には山が曇つてゐたり、雨が降つてゐたりして果たさなかつたが、今日は兩方都合の好い日である。が、少し風が強過ぎるやうである。それで女中のお秋に相談しようとおもつて令鈴を押すと、お秋の代りに物靜かな老婢が廊下を歩いて来て、用を伺つた。

『今日これから駒ヶ岳に登らうと思ふんですが、すこし風があるやうですが、ごんなものでせう。』

さういつて訊くこゝろ、老婢は、

『左様でございますねえ。』といつて、外の木々の風に揺れてゐるのを眺

めながら、思案顔にこちらを向いて、

『今日はすこし風が強過ぎるやうでございますから又の日になすつた方がよろしうございませう。下でこの通りですと、山の上はすつこ風が強うございますから、今日はお止めになつた方がお宜しうございます。』

人柄さうな老婢は忠實にさういつて、きつぱり止めた。

『ちや止ませう。』

と云つて、私はその時は斷念した。そしてまた暫くして、やがてお秋が運んで来た晝飯を喫しながら庭の方を眺めてゐると、立木なごは先刻と同じやうにやつぱり風にざわめいてはゐるが、午前にくらべて稍靜かになつたやうである。日光は相變らず朗かに輝いて、そこらの庭樹や芝生なごが金色を帯びてゐるかのやうに思はれる。私の心はまた動いた。

『お秋さん、先刻駒ヶ岳に上らうとおもつて相談したら、風があるので

止めた方がいゝといふので止めたんだが、さうだらうねえ。先刻よりか少し無くなつたやうだが。」

お秋は外を眺めながら、

『このくらゐなら大丈夫でございませう。ついすぐですもの、ちきに上れますよ。』

と事もなげにいふ。彼女等は昨日の朝私がまだ寝てゐる間に、お客や番頭や女中なま七八人の多勢で上つて来たのである。

『いつてゐらつしやいませ。それは方々がよく見えて、いゝ景色でございませう。昨日の朝は富士山がよく見えました。あんなに富士山がよく見えることはめづらしいつて番頭さんがさういつてゐました。それは面白うございませう。皆で勝手にいろんな面白いことをいひながら。』

それでまた私は心動いて、箸を置くと嬉々しながら渴を覺えた時の用

意にと、大きな梨を二つ懐に入れて例の櫻のステッキを杖ついで、湯の花澤へゆく道から左に折て急がぬやうに登つていつた。道は暫く浅い溪の底を歩いて左右から蔽ひかゝつた苺の間を迂回しつゝ進んでゆく。ところどころに粗雑な休み臺がしつらへてあつたり、道の急なところには丸太を横へて磴道を設けてあつたりする。私は三步にしては憩ひ、五歩にしては振願つて上つて来たあまを眺めしてゐるうちに次第に自分のゐる處は高くなつていつた。そして知らぬ間に浴舎の直ぐ背後に聳つ寶藏岳は自分の脚下になつてゐた。自分の位地が高くなるにつれて四邊の峯々がまた漸次高標を増し、雄偉の度を加へて来た。双子山、聖ヶ岳、明星岳、明神岳は、折から午後の秋の陽を全山に浴びて、愈々靜寂の容を示してゐる。山下の坦々たる一筋の新道は双子山の裾をめぐつて長いリボンを展べたやうに遠く、駒ヶ岳の尾を引いてゐる彼方の高原の果にいつて没

してゐる。尙ほ見返りく段々登つてゆくに從ひ、蘆の湖の水はすぐ右方の眼下に開けて來た。午後の日光を浴びて銀灰色に輝いてゐる水の上を幾つかの短艇が帆を孕ませて白鳥の如く動いてゐる。塔ヶ島の離宮、箱根町の人家、例の美しい八町の杉並木は沈んだやうな暗綠色を刷いて連なつてゐる塔ヶ島の蔭になつてゐるその邊は水の色も日光を反射しないので硫酸銅のやうな美しい紫色を湛へてゐる。山の色も水の色もそこら中の物が貴い顔料を落したやうに悉く翠綠の單色に彩られてゐる。更に左方に眸を轉するに、相模灘はまるで廣重の繪を展いたやうな濃藍色をして眼界に擴がつてゐる。小田原、國府津、大磯、それから江の島から逗子、葉山、三浦半島にまでつゞく津々浦々が双眸に集つてくる。大山、足柄山、金時山の峯巒が遠近に從つて幾色にも濃淡を劃しながら秋の陽を受けて桔梗のやうな色、朝顔のやうな色さまざまに浮びいでゝ

京の町から思
ひを百里の遠
きにやる。結
び得て妙であ
る。

秋の駒ヶ岳

言文一致體と
文章體とを巧
みに織り交ぜ

る。私はまたちつと其等の遠景に眼を遊ばして一と息吐いた。清澄な山の上の風は心地よく汗ばんだ肌をさらりと吹いていつた。夏の初になるとそこら中眞青な夏草の上に點々として白い山百合が咲く。今は丁度その白い百合の花が靜かな山の夕暮れの中に瞬いてゐる時分である。かうして今身はそこから百里を隔つてゐる京の町の中にも香氣の高いその百合の香が聯想作用で生々と私の臭官を刺激するやうである。

(七年六月三十日京都安井の寓にて)

秋の駒ヶ岳

東京にゐても同じ宿屋住居の身の希くは心ゆくばかりに山靈に親みつつ、温浴と散歩とに疲れし頭を休め、輿の乗する儘に書を読み文を作らんもの、つひ腰を落着けしに、こかくするうち四十餘日を此處に暮しぬ。

てゆく、天衣無縫である。

一時は身の置き場の無いまでに劇しかりし今年の夏も、はや昨日こそぎゆきて、まして梅雨このかたや、時候狂ひなる今年は、山の上に秋の訪れるも一入はやく駒ヶ岳、神山の裾より双子山の麓につゞく一望の茅原風清ふして秋心に満ち、新に穂を脱ける薄尾花の吹く風に靡けるさま野趣いこ深し。

櫻の若木にて造りたるステッキを打ち振りつゝ心の赴くまゝに、肩を没する茅萱の中を分けて細徑を踏みゆけば、女郎花、野菊、水引、米蓼、兜菊、萩など、その間に點綴して咲き溢れたるが哀れなり。

九月七日

二百二十日を前に控へたる此の頃の天候にて、天は稀らしく晴れたれども、西南の風強く吹きて樹梢を鳴らし、戸障子を揺り動かす音騒々し。されど、さすがに秋は秋なり。日は尚ほ強く輝けども空碧く澄みて見る

自然描寫の如何に精細なることよ自然を愛する深い心の底から湧き出てくるのだ

優れたる紀行文家としての一面がうかゞはれる。

物すべて金色の光を浴び、温泉宿の背後に鬱蒼として聳てる寶藏ヶ嶽は明るき日の光にくつきりこそその全姿を浮び出して、明淨洗へるが如く、頂邊に到るまで樹々の梢端まで悉く葉の色を區別し得べし。陰晴一瞬の間も定りなき双子山も今日は駒ヶ岳この狭隘より吹き来る風に雲霧を拭ひ去りて、全山を蔽ひ隠す篠竹の、波の如く、強風に吹き靡くさまも縁端より認めらる。

蘆の湯より蘆の湖畔まで一里内外、双子山は僅に十三四町の登道のみ。蘆の湖畔へも既に數度散歩しぬ。双子山へも登りぬ。双子山の裾をめぐるて舊東海道の甘酒茶屋へもゆきぬ。余にこつて唯一つ未踏の地は駒ヶ岳の頂上あるのみ。駒ヶ岳(四千三百七十尺)神山(四千七百尺)と並びて箱根山群中の主峯なり。之を日光の中禪寺湖を俯瞰して屹立せる八千尺の男體山なごに比べて敢て雄彙は云ふ能はざれども、目覺むるばかり

の茅萱、薄なきの青き夏草を以て全山を蔽はれたる清楚なるその形は恰も大なるヘルメットを伏せたる如く、溫柔にして親しみ易く、蘆の湯の西北に近く聳えて朝に、晝に、晩に余が眼を樂しましめぬ。浴舎のあるところより頂きまで僅に一里ばかり、婦人子供さへ午前のうちに容易に往いて復れるほどの適度の散歩道なり。遠目にはさながら滑かなる青絨氈をもつて包める如き半圓形の山腹を、殆ど編み靴の紐の如く九十九折せる細徑を白衣の人の三々伍々登攀するを屢々望見しぬ。夏に疲れたる余はわづかに浴舎附近の低き丘陵を散歩しつゝ、毎にその駒ヶ岳を仰いで少しも早く彼の頂上を極め得るまでに健康の回復せんことを祈りぬ。

幸にして二十日ばかりするうちに健康は次第に回復して、肋骨の數へらるゝまでに傷ましく瘦せたる身體も稍々肉付き、蘆の湖或は小湧谷あたりまで一里強の崎嶇たる山道を往復しても、さまで疲勞を覺えざるの

みか、歸り來りて快く汗したる體を硫黄の香懐かしき温泉に浴すれば全身の筋骨この一時に溶けるかと思ふばかり譬へがたき快感を覺え、それとゝもに胃の腑は次第に軽く、淡き空腹を感じそめぬ。

かくて駒ヶ岳に登るべく余の元氣は次第に回復し、余の四肢は徐々に馴らされたり。しかも東京へ書き送るべき原稿は尙ほ余の適度の運動をさへ束縛しぬ。今日健康のやゝ回復するこゝもに着手したるその原稿も昨日の夕刻までに認めをはりて、今朝の郵便に投函しぬ。次の仕事の期日は眼前に迫り居れど、今日明日二日位は着想を考案しつゝ心肝に湯に漬り、樂々足踏み伸さんと思ひしに、幸なる哉、此間よりいつも雲霧に鎖さゝれたる駒ヶ岳も今日は珍らしく晴れて、浴舎の庭より明にその全姿を認め得べし。流石に大事をこりて、精力の無益なる放散を慎しむし余も、今日の美しき日の色を浴びつゝ、碧く澄みたる空に繪の如く點

出せる駒ヶ岳を見ては遊意勃々として禁ずる能はず。女中を呼んで相談せんものと鈴を押せば、いも物静なるお針の婆さん出て来て用命を訊く。

『今日駒ヶ岳に上らうと思ふんですが、こんなものでせう』云へば、彼女は、稍沈黙しつゝ座敷より庭の樹木を吹き揺れる風の動静を見乍ら、静なる言葉にて

『左様でございますか。すこし風が強いやうで御座いますから、今日はお止めになつた方がよろしう御座いませう。』

『さうでせうかね』

『下がこんなでございましたら、山の上は一層ひどうございます。もつゝ風の無い日にお登りになつた方がようございませう。』

余はそれをきいて、忠實なる老婢の言葉に服して、即座に思ひ止りぬ。

やがて三時間ばかり経過して、午餐運び來れる女中に、またそのことを語りて今日駒ヶ岳登山の望みをいへば女中は、

『此位の風なら大丈夫でせう』といふ。

風は前より静まりたるが如し。如之彼女も亦昨日の早曉四時滞在客や宿の番頭、男衆、女中なご十人ばかりにて登山し、余の眼覺めたる八時頃には既に下山したるなりき。

而して昨曉の展望は雲霧のために妨げらるゝことなく、相模灘、三浦半島、遠くは房州の山々を前に眺め、後は蘆の湖の水を脚下に俯瞰し、遠く曉靄の末に富士山をも眺めたりして山上の絶景を激賞しぬ。

余の遊意は愈々動きぬ。午餐の箸を投ずるご同時に心を決して、女中に麻裏草履を持ち來らしめ、例の櫻のステッキを打ち振りつゝ渴を覺えし時の用意として梨子を二個懐に入れ浴衣を二枚重ねて出でぬ。初め男

衆を連れて行かん。女中に謀りしに、今日は生憎大掃除にて手の隙きたるものなしといふ。ナニ一人にても大丈夫ならんこて登りぬ。

道は暫らく山麓の陥落溪に沿ひて茅萱の間に切り拓ける細徑を傳ひてゆきぬ。高の知れたる山とは知りながら、はじめて登る山なればやゝ緊張したる心持にて漸々分け登るに、處々に口ハ臺の設けなきもあり、下駄ばきのまゝ歩きし足跡なき残れるを見て、此の山の畢竟、大なる公園の中の築山にほかならぬを感じぬ。

けに箱根は日光に比べて、深山幽谷の感極めて乏しけれど、これを婦人子供にまでも制敷し得らるゝ一つの山上公園として見んには斯くまで近づき易く、危険少き高山は他に求む可からず。近年箱根全山を開いて山上公園にせん。經營しつゝあるは宜なり云ふべし。余は此處に來りて常に駒ヶ岳の麓を逍遙しつゝ彌々その感を深うしぬ。箱根全山一つの

纏りたる山上公園なり。この上は東京との交通を一層便利にして日本の公園たらしむるに共に、上野、井の頭、日比谷と同じく東京の公園たらしめたきものなり。

ところづくに丸太にて足場をつくれる山道を登りてゆけば、いつしか脚は既に寶藏ヶ岳の頂を踏んで遙に相模洋を俯瞰して立てるなりき。明星ヶ岳、明神ヶ岳、聖ヶ岳等の四千尺に垂んとする箱根火山群の外輪山は蜿蜒として一眸のうちに全景を開展しぬ。小田原、酒匂、國府津、さては大磯に續く相模の平野はその彼方に遠くひらけ、大山、足柄の連山また秋天の下に淡藍色に染めなされたる艷姿を聳てたり。(六年九月廿四日函嶺にて)

春雨日記

三月二十五日——

今歳は寒さ例年よりもきびしかりしうへに、餘寒いつまでも去らず、陰濕なる天氣のみ打ちつゞきて、寒冽なる外氣は人體より體温を奪ひ去るかと思はしめたり。剩さへ西北の風日々砂塵を冲天に漲らして、黄雲漠々都の空を掩ひ、麗日を仰ぐこと、三十日の間にわづかに一兩日にすぎず。かくの如き不順なる氣候に索漠たる自然とは人間の生活をして常に不愉快ならしむ。予東京に永住すること茲に殆ど二十五年、未だ嘗て今歳ほご東京の風土の厭ふべきを感じたることなかりき。

正月五日箱根に入湯して四十日を温泉宿に過し、二月十四日箱根を下りて途中大磯に知人をたづねたる頃は湘南の梅既に白く、春暖麥圃の畔に罩めて人の心自から緩かなるをおほえたり。東京に歸り着きたるはやがて夜の八時を少し過ぐるころなりしが、煌々たる無数の電燈の輝く停車場の廣場には暖き雨にまじりて春雪霏々として暗を照らす火光の中

に映ずるが見えぬ。淹留四十日の間に春は既に都門を見舞へるなりき。かくて一ミたび春めきたる氣候は再び極寒にも覺えぬ春寒に逆戻りして折角芽みたる窓外の花卉さへふたゝび畏けてしまひたり。去年は予が假偶の庭に立てる椿、二月の廿七日、久し振りに降る雨の中にふと紅蕾を綻ばせるに氣付きたりしが、今歳はその心して日々忘れず眺めしに、いつまでも蕾は開かずして今は彼岸も過ぎて三月を剩すこと僅に五六日となりぬ。今日はじめて去年の如き紅蕾を見るこゝを得たり。これによつて見るに氣候は正しく一ミ月を遅れたるが如し。

大和の月ヶ瀬の梅は年々三月初旬をもつて満開するならひなるに今歳は十九日に東京を立ちて月ヶ瀬を見にゆきし知人の廿四日に歸京して語るをきけば、尙ほ雜木林なりしと云へり。

さはれ予が意外の樺、榎なきの巨木この二三日の春暖に、さすがに梢頭

のいたく膨みたるが春雨の降る中に眺められぬ。数日前までは網の目の如き細枝の寒空を摩してそより立ちたる、見る眼に少しの懐しみもなかりしに、今日はその細枝に悉く芽を付けたるが點々として認むることを得。やがてなほ二三日の暖氣を待ちて其等は淺緑に萌えいつるならん。春は氣候不順の中にも既に見舞へるなり。

今日は南風吹きて正午前より春雨降りいで、絲の如き細雨躰々として窓外の襜、椶なごにふりそよけり。先日うちは西北の烈風吹き募りて北に面したる窓は一日戸を閉ぢたる上に尙屏風を以つて隙間洩る風を防ぎたりしが、今日の南風こそ心地よけれ。南風は常に甚だ好ましからぬ風なれども今日の風は細雨のために濕りて塵埃を揚げず、過日來の春寒をも一と吹きにふき拂ふかと思はる。南が塞がりて北のみ窓を開放したる居室は雨の降り込むうれひもなく、居ながらに春雨に降り罩めたる市

艶麗なる筆致
は著者の一面
をうかゞはし
める。

街のさまを展望するここを得るなり。しとくと降る雨の中に蛇の目の傘かたむけて道ゆく女の吹き來る南風にはらくと高く裾を捲くられて紅の色翻へり、白き肌の耻かしけに露はるゝが、距離遠ければ足音さへごどかぬ吾が眼に入れり。女は片手にて強き風に奪はれさうになる傘の柄を握り、左の手にて着物の裾を抑へつゝゆけり。春信、歌麿ならしめば直ちに繪に描くべき風情なり。

雨は止むかと思へばまた降り、ふるかとおもへば忽ちやみ、かくて夜に入れり。夜とよもに雨の音は風の音に交りて窓外の櫂、椶の枝のさはくく風吹き揺れる音枕に響きて、馴れたる耳にもいと凄まじ。更くるに従ひて雨の音の加はるにつれて、二枚重ねたる夜具の暖さ堪えがたければ蒲團のみ一枚はねて寝ねぬ。

二十六日——

著者の淨瑠璃
觀として見る
べきものがある。

夜來の雨やみたれぞ、南風昨日のごとく強く吹きて、動もすれば厭ふべき砂塵を揚けんこす。薄く晴れたる空より時々思ひ出したやうに日光明るく照すかとおもふこきに日の色忽ち薄れて風の音のみ騒がし。

今日晴天ならばエヌ、チイの二君と隅田川のやゝ上流のあたりまで午後より散歩に出掛ける約束なりしにこの風にては散歩も不愉快なり。エヌ君午後より予を誘ふ善なり。たゞひ誘ふも遠足を止めてごこか淺草あたりにて夕飯を認め、公園を歩いて珍らしき活動寫真か、パテー館に入りて團司の義太夫を聴くゝらるにて今日を終るならん。それもまた可なり。

予は義太夫を好む。而して予は義太夫いはずして殊更らそれを淨瑠璃音樂といはんとす。通例たゞ淨瑠璃といふもよし。

予は少年の頃最も芝居を好みたれども今は必ずしも觀ることを欲せ

ず。況んや淨瑠璃物の類ひはこれを芝居にて見るよりも淨瑠璃に語り三絃の音樂に奏して聴くの遙に優れるに如かざるり。

三味線の音！あゝいかなれば斯くの如き簡單なる樂器によりて彼の如き美妙なる音色の奏し出されることぞ。所謂義太夫三味線の音色に淨瑠璃の曲節とは實にわが邦徳川期時代の國民的理想とその感情とを完全に表現して遺憾なしと云ふべきものなり。

無論淨瑠璃樂も幾つも聴けば、愁歎場は愁歎場、急迫の調は急迫の調、こいふごこく、いづれも類型にて單調は止むを得ざれども、國民の理想、道徳、運命等に對する感情、さては人間の哀傷、忿激、悲壯、悔恨、歡喜あらゆる感情の千態萬様を僅に三筋の絃の抑揚撥撫の關係によつて表現するはこれを奇蹟といふも必ずしも過言にあらざるなり。自然は常に屢々人間とその他の世界との不調和を示せき、天は何處かにて其等の間

に調和を形造れるなり。人間の靈智、自然の藏せる神祕を啓かんとして無窮の工夫を積むや、いかなる處にてか遂に人間とその他の自然との間に大なる隠れたる調和の繋かれるを發見せずんばあらざるなり。それ三味線の三筋の絲の如き固より極めて簡單なるものにあらずや、しかもそれが朱檀の棹に張られ象牙の撥によつて打たるゝ時、複雑なる人間の感情はその三筋の絲に傳はりて起り來る。是等の簡單なる樂器と、それを操つる樂人の指端の鍛錬によりて妙音を發し、その妙音に人間の感情を表現することについては、既に吾々が熟知のこととして何等の不思議を挾まざれども、一度び小兒の如き稚き心に立歸りて再考する時吾等は實に不思議の感に堪えざるなり。人間の抱ける複雑なる感情は、人間以外の自然に何等かの工夫を加へて、それをして音響を發せしむる時其等はまた人間と同じき感情を物言はしむる器なることを思はしむ。予は斯の如

き意味に於て、人間もその他の自然界の萬物も其等の生活と存在との間に不思議の調和と關係との存するを思ふなり。

日本人は、かくて彼等特殊の文化と工夫によりて三味線を發明し、これによりて彼等の喜悲哀樂の感情を表現することに最も習熟したり。併も予はかくの如き理屈の穿鑿はさておき、三味線の發する音を好むより、而して就中淨瑠璃音樂を最も好む。

それ昔の江戸に發達せる三味線樂の最も發達せる曲譜は清元、常盤津、長唄、一中、河東、富本等種々あり。而してこれに對して京阪の地に發達せるものまた種々の分化あれど、就中通例彼地にて淨瑠璃といへる即ち義太夫節を以つて最も復復にして完全なるものとせり。

予は屢々京阪にゆくことを春秋旅行の樂しみの一つとすれど、京阪の現況は最もこれを好まざるなり。その人間の多くが下品にして不作法な

現代婦人を暗
に諷刺せるに
非ずや。

る、趣味の低劣にして俗欲のみ盛なるは實に彼地の人間の概して東京人と比べて異なる特色なり。しかも一たび浄瑠璃音楽を聴く時下品なる京阪人が忽ち上品になりて聴ゆるこそ不思議といふも愚なり。

諸君は浄瑠璃の樂曲中のお姫様を知れりや、「八陣守護城」の難絹を、「玉藻前」の桂姫、「初花姫」を、「太功記」の初菊を、何ぞ彼等の美しくしてその運命の幸薄きや、彼等の言容振舞の優雅にして、その感情の何ぞ哀切なるや。斯の如く美しき容姿、斯の如く可憐なる情緒との所有者たる彼等典型的日本婦人はまた當時の日本の士人の理想として、彼等は若し運命の極端なる矛盾に陥りし時、彼等はその花顔玉姿をも惜まず潔く白刃に伏して死するこゝをも恐れざるなり。

凡そいかなる文學の着想も、美人の薄命ほど萬人の意を惹くべき最も優れたる着想はあらざるなり。それが餘りに甘美なる着想なるが故に畢なり。

竟古來數知れざる作者の手にかゝりて陳腐になれるに過ぎず。この最も人氣を惹くべき着想を取扱ひて最も完全に音樂に表現せるものは淨りなり。

余は大阪にゆくとび文學座だけは必ず缺さず聴くを樂しむせり。而して操り人形の中にはお姫様を観るが最も心地よし。その優雅なる振舞ひ、華麗なる容貌、日本婦人の理想は依然としてこゝにあらざるべからざるを思へばなり。

東京にて現在淨りりの聴くべきもの小清、昇之助、團司等みな大阪より來れる女藝人なり。余は一夕の寄席に於て彼等の微音をきくは歌、羽左等の歌舞伎座に於ける吉野山道のきを觀るよりも遙に以上の感情の漾蕩に快感を樂み得らるゝなり。(七年三月廿六日)

趣味頗る廣き
を注意したく
思ふ。

讀みゆくまゝ
に爽涼たる秋
の氣が迫る。

高野山奥の院

山の上は秋の來るのも一入早い。もう昨日今日夜なき書院の机に憇りながら静座してゐると前裁の叢では地蟲の鳴く音がじゝと聴えてゐる。爽涼の氣は夜の更けると、もに肌に滲みて、心は底までも澄みわたるやうである。

流石に晝間はまだ赫々と残暑の日が照つてゐるが、高く紺碧に晴れた空の色、群青を塗つたやうな老杉の頂から湧き出る白雲の光にも秋思は既に天地に満ちてゐるのである。方丈の廣い廊下に佇んで其等の色に見入つてゐると、胴の紅な蜻蛉が秋を知らずる精靈のごとく明るい日を浴びながら庭のうへを軽く飛び交うてゐる。洗つたやうな眞青な夏草の茂つた築山を一つ越して彼方に轟々雲を摩して聳ゆる金剛峯寺の老杉の林

山の秋が目に見えるやうである。

から蟬時雨が、恰も銀鈴を振る如く訝かに響き渡つてゐる。

金堂の前にある古池に蓮の花もほつ／＼咲きそめた。私は、泥の中から咲き出で、得も云はれぬ清香を放つ此の君の紅白の色や緑の葉の形をこの上なく愛でるのであるが、東京では不忍の池が蓮の名所であるけれど、炎暑の最中として、それが咲く頃はいつも體も心も取り亂したやうになつて、静かな心持ちで蓮の花なご見てゐることも出來ずに過ぎてしまふ。それが此の山ではめづらしく落著いた氣分で樂むことが出来る。よく汽車に乗つてゆくと、尾張地方の鐵道の線路に沿うて土を取つたあとの溜池なごに紅白の蓮が咲いてゐるのが窻から眺められるが、さういふのは何となく同じ花でありながら妙に卑しい。高野山に咲く蓮花はそれに反して思ひなしにも尊く清けである。

蓮華ばかりではない、山内到處にある小さい古池や苔寂びた泉水なご

に睡蓮や河骨の咲いてゐるのがよく見られる。

無常觀とても
いふべきもの
が閃めいてゐ
る。

奥の院へも先月初め登山した當座は度々參詣したが、この頃太分暫くおまゐりせぬので、昨夜夕飯後に久しぶりにまゐると、一と月たつ間にそこらは、また格別、何處よりもめつきり秋らしくなつたことが思はれた。一の橋を渡つて森々たる老杉のそゝり立つ木下暗に入つてゆくと、菩提の寂びた無数の墓碣は道の兩側に累々として重なりそこから大師御廟まで十八町の間には垣を築いてゐる。今は丁度このあたりの魂祭りにあたるので、見上げるやうな大きな石を積み上げた古い石塔の前には、ごごかの菩提寺で手向けたのであらう、裸のまま立てゝある蠟燭の火が杉の下闇を吹いて来る夜風に揺々と覺束なけに動いてゐる。私にはそれが宛ながら冥府の人の瞬いてゐるやうに見えた。

大師、此の山を開創以來千百年の間、幾世の人が貴賤上下の差別なく

夢のやうにして生死していつた自分の跡を永遠にまで印さうとする敢果ない望みから残して置いた墓碣は今はこのわたりの溪を埋め、峯を蔽ふばかりに堆積してゐるのである。その間に四抱へ五抱へにも餘るやうな杉の老幹は丁度昔のギリシヤやローマの宮殿寺院なごに見る圓柱のやうに亭々として二十間三十間の高さに立ち並んで、翠蓋を翳してゐる。私はそれを如何なる人工の寺院にも優れて立派な佛殿だと思つて幾度となく佇立つて巨大な圓柱を見上げながら歩いてゆく。するとつい先刻までは夢の如く淡い色をしてゐた八日ばかりの月が、いつの間にか色を増して金色の光を放ちながら、杉の茂みから自然の殿堂の中を照してゐる。やがて玉川の清流に架した無明の板橋を渡つて、燈籠堂に詣うでると、油煙と、蠟燭の煙に黒染んだ御堂の中には無数の金燈籠に參詣の人々の上けていつた燈明の火が處狭きまでに並んで揺れてゐる。此の山開創以

來の古い傳説になつてゐる貧者の一燈は、富者の萬燈と相對してほそほと明煌々たる清光を放つてゐるのも頼母しい。中にも白河法皇の御獻燈になつたといふ一燈は、火の色も他よりは一層冴かに太くして、七百有餘年來縷々として不滅の光輝を放つてゐるのもいと尊く拜せられた。燈籠堂をめぐつて堂の後の大師御廟の前に出ると、そこには若い四五人の僧侶が香の煙のたゞよふ中に聲高らかに經文を誦してゐるのが夜色沈々たる山谷に飴して神寂びて聞えてゐる。私も暫く廟前に拜跪してゐた。やがてもとの道を戻つてくると、昔ひとりでに龍燈の上つたといふ老杉の頂に、月色は前より一層さやかに輝いてゐた。(七年八月十六日)

蘆の湯日誌

九月二十五日

著者が孤獨の境涯を語り得て尊し。

これは又著者が自然を離れて人間を観察せる、著者獨特の境場である。

午前暫らくの間碧空を仰ぎしも、二三時間にて直に双子山は雲霧に包まれ、正午ごろより驟雨の如き雨到る。さる二十一日に一日快晴を見たるのみ、今日で四日間の雨天なり。碧空と太陽の光線を欲する心切なり。身に適する神泉に浴して僅かに此の心を醫するのみ。今日も一日雨の中に降りこめられて暮しぬ。駒ヶ岳、神山、聖ヶ嶽、明星嶽、明神岳を仰がざること、はや幾日。晴天ならば駒ヶ岳の麓の茅萱を分けて思ふさまに散歩せんになご思ふ。

九月二十四日

雨。——中庭一つ隔てたる廻廊の彼方の部屋に滞在せる五人の滞在客あり。男二人女三人。一人は二十六七とも見ゆる瘦形の、顔の色や、淺黒く身長高き藝者。女中に聞けば葎町の藝者とか。一人は四十を大分越して、やがて五十にも手のとどくらしき頓狂なる顔にて、豚の如く肥満

賤しき女の中にもこの著者の愛の眼は輝いてゐる。記憶深き部屋に別るゝの情の切なるものがある。感傷的な情緒が躍動してゐる。

したる女、これもいづれは前身は左褻とりし身、待合のおかみさんです。あの方一人で面白いことばかりいつてゐらつしやいます。と、女中はいへり。余が部屋にも彼の女の頓狂なる洒落や、戯談の笑聲時々洩れ響く。一人の男は昨夜夜遅くなりて自動車にて着きたる客。女中は、其の藝者の旦那ですと語れり。昨日の日曜と今日の休日とをにかけて、あとより來れるなり。その他の男女は藝者の兩親にて、彼等の「お母さん、お父さん」と呼ぶ聲す。その老夫婦は娘を藝者にして養はれてゐる境涯なれども、ごごか人柄な、正直さうな顔付にて、以前は商人なりし者が失敗なごした結果娘をさる境涯に入れしものと見ゆ。廊下にて行き合ふとき別室にゐる老夫婦は余にも丁寧に首を下けて挨拶なごせり。余は花柳界に棲む者の親にさも悪黨々々した人種を認むるともに、斯の如き正直し人相を備へた人間のあることを屢見る。

夜、温泉宿の雨にはふさはしき意氣な三味線の音色彼方の部屋より響き來る。清元なり。頓狂なる顔したる女の弾く音湧えてきこゆ。

余は廊下を隔てゝやゝ遠く離れたる板屋葺の茶室めきたる三疊の部屋に寢床を設けしめて、そこに寢ぬ。點滴の音靜に軒を繞りて宛から春雨を聴くが如し。夜いと靜にして心も亦た靜かなり。

晝間ならば、書を読む机に凭りて手を伸ばし三尺の小窓を推せば、双子山は直ちに板廂に迫りて、その全姿を仰ぐを得べし。晴なれば更に佳し。雨亦た悪からず。これ今の余にとりて、芭蕉が武藏の深川の草庵、鴨長明が山城の方丈の住居にも比べつべしなご、獨りよがりの似而非風流に思ひきめつゝ雨の音に交る三味線の音じめを孤獨の添乳にきゝつゝいと安らかに寢ねぬ。

九月二十三日

脱俗的な一面がうかゞはれて面白い。

雨。昨夜、昨日まで一と月近くも住み馴れたる別館より此の離室に移り
 したため、寢處變りて、廊下の足音耳に響きて快く眠る能はず、晝寢と、
 入浴と、静思と雑念の叢生とをもつて一日を消す。

九月二十二日

曇雨、朝物馴れたる番頭久しぶりに顔を出し、今晚東京の中學生など
 の團體の投宿多ければ、離室の更に静かなる別室に移轉せられたき旨を
 謀る。余にもとより異存のあるべき筈なし。尚ほ一應その部室をお目に
 かけんとて、番頭案内す。先頃まで樺山海軍大將なごの滞在せし棟つゞ
 きのいと奥まりたる別世界なり。

「それから、あなたなごに丁度可い、こんな部室もありますから。」とて、
 番頭は更にその室に添うたる廊下の行きづまりになりたる階段を一二段
 踏みて茶室づくりのやゝ小さき、紙襖をさつと開けば、中は普通の疊よ

りも狭き三疊の間にて、雑ながら二尺の違棚、同じくらの入床をしつ
 らへてあり。

「お書き物なごなさるには、此室がいゝでせう。」

「いや、これは誂へ向きです。ぢや早速こちらへ移ることにしませう。」
 東京の炎暑を避けて八月十日の夜はじめて此の地に來りし時は恰も夏
 期中の最も雑踏を極めたる際とて、佳室なき折柄なれば余は室の良否は
 さておき、何よりも人離れして静かなることを以て第一條件——むしろ
 唯一の條件として番頭に謀りぬ。

「よろしうございます。かねておはがきも頂きましたから、心當りがご
 ざいますから、明日お目にかけます。今晚は少し騒々しうございますが
 一晩だけごこかで御辛抱下さいまして。」

その翌日余は本館の帳場よりは三四町も離れたる廣つ場の中に立てる

二間の物置き同然の一軒家に案内せられたり。

「内でも平常使はないところで、汚いことは汚うございますけれど、その代り静かです。昨晚お見えになつた方が一間の方におるでになります。」

余は斯る混雑の際、悪く邪推をまはして室の不平なきをいふは極めて野暮の沙汰と知れば、

「結構です。」と快くそこに落着きたり。芭蕉は曾て北國を行脚して、寺に一泊を頼みて断られ、野宿をさへ覺悟しぬとか。幸ひに隣室の客は東京にても最も好評ある中學校の校長にて、六十近き老年の紳士某氏なりき。余は十日許りを、老紳士の隣室に起臥しぬ。やがてその紳士の去りたるあと五六日その室に移り住みたるに、今年は秋冷を覺えること例年よりも早きさへあるに、八月の二十日前後になれば引揚げてゆく

客續々相踵ぎて、中旬頃の雑沓は忘れたやうに寂然として、暗の夜なきは寂しさ一入まさる。余はそれにも拘らず依然その静寂を棄てかねて尚ほ五六夜を明しぬ。然るにその大離室を受持たる女中は、十七の少女にて老紳士去り、用事の少くなりて以來、頻りに寂しさを啣ちしかば余は番頭に謀りてそこよりは途の中ばくらる本館に近寄りたる別館の端れの部室に移りぬ。こゝの巨大なる一棟も容は悉く去りて、今は余一人のみとなりぬ。此處を受持たる女中は伊豆の生れ、三十ばかりの質朴なる田舎者なりしが、がら空きの部室の並びたる薄暗き長廊下を幾曲りもしてその行きづまりの部室に唯一人のみほつんと孤坐せる余を見てさも氣の毒さうに且つ不思議がりぬ。

「旦那さま、おさびしくはないんですか。ひとりぼつんとして。」

余も最初の二三夜は流石に寂莫を覺えたれど、やがて居馴ては次第に

心安く、八月も末になりつゝ、そこに夏中の疲れたる健康も漸次回復し來れることを身に覚えそめぬ。

余は八年前一度帶妻の境遇より獨身の境遇に移りて、常に孤獨を愛しつゝ既に七年を経過しぬ。孤獨も馴ては不便ならざるのみならず、孤獨に耐へ得る心境に達するのは一つの修養を要することも知りぬ。孤獨は一種の背水の陣にして、且つ現世にある間の一種の強味あり。

その部屋に起臥すること八月二十六日より九月の二十一日まで二十七日間、その間に今春以來——否去年以來——否々何年來不調に悩まされし不眠状態もやゝ整調に復したるを覺えたり。その間に、長く靜思に堪へざりし頭腦も聊か回復して多少の執筆さへ叶ふやうになりぬ。其間に駒ヶ嶽にも登りぬ。記憶多き部屋よ。余は今日居馴れたる汝と別るゝなりき。去て東京に歸るも遠からざるに。

午前の中に引越しぬ。昨夜は幸に熟睡したれども月初以來の書き物昨日漸く一段落つきて、尙ほ甚だ疲勞を覺えければ、午餐の時五勺ばかりの酒に甘酔しつゝ蒲團を敷かして、浴後の身體を横へて晝眠。夜按摩。廊下の先の隣室より三味線の音夜更くるまで聞ゆ。音のぬしは東京の藝者とか、三四日前の晴れたる日蘆の湖道の散歩にて見し一と連の女ならん。

九月二十一日

久し振りの快晴に氣も伸々となりぬ。六時半頃一度目を覺ませしに障子に映る日影は麗に快晴を報ず。さう思ひつゝまた微睡としてやがて八時過ぎ、男衆が長く閉切りたる、部屋々々の雨戸を練る音に快き眠より覺めて起きいづ。九日以來連日の雨は、一昨々日十八日に一日晴れたるのみ。十日ばかり氣も閉ぢるばかりに降り籠めたるに今日は二千八

百尺の山の上もや、薄暑を感じるほどの快晴なり。碧空には白雲漂よひ風清く、氣澄みて浴舎の屋後を擁して峙つ寶藏岳は樹々の梢端まで明かに認めらるゝ心地す。

「今日は好い塩梅です。」と行き合ふ者ごとくに晴れを悦ぶ聲聞ゆ。

一浴の後、下婢の部屋の掃除する間、櫻のステッキを打ち揮りつゝ長く踏まざりし細徑をわけて笛塚山に登る。連日の淫雨にやゝ末枯れ氣味になりたる満山の薄尾花も久しぶりに太陽の光線に喜ぶものゝ如く。爽かなる香氣を吐けり。相模灘は尙ほ秋晴れの物々しき烟霧に鎖されて見えす。稍雷氣を藏したる薄墨色の雲の群は蓬々として酒匂川の上空に密集して明星ヶ岳の尾根を包みて徐々に押寄せつゝめり。宮城野の溪谷は深く霧の底に没して、僅に明星ヶ岳の肩のあたりが雲霧の隙間より隠顯するのみ。明神ヶ岳も白雲の奥ふかく隠れて純白の煙霧は一刻づゝに

廣がりゆけり。

聖ヶ岳も肩より下は、須雲川の谷を鎖したる雲霧に没して、薄紗の如き白き霧の千ぎれは双子山に向つて奔騰しつゝあり。振顧つて駒ヶ岳、神山を仰げば彼等も上半は雲に蔽はれたり。太陽は其等の雲と山とに一樣に強き光を漲らせり。

箱根山を流す新内

エムさん——私が箱根にきた時分には、まだ双子山の麓では頻りに鶯が鳴いてゐました。蘆の湯から双子山の裾をとほつて蘆の湖にゆく道にうぐひす坂といふ碑の立つてゐるところがありますが、私は、蘆の湯のある處くらの八月に鶯を鳴くの聞いたことはありません。

しかしその鶯の鳴く聲も八月の末に近くなると、だんぐりに聞えな

くなつて、九月の初になると、蘆の湯のすぐ西北に峙つ駒ヶ岳、神山の麓につゞく廣い茅原から双子山の裾にかけて一面、芒尾花が穂をぬいて爽かな初秋の風に揺れてゐます。私は山の上の薄暑い日を浴びながら其等の茅萱を分けて丈なす夏草の中を日々散歩して暮しました。野菊、女郎花、米蓼、萩などもその間にまじつて咲きこぼれてゐます。

箱根には御ぞんじのとほり方々に湯場がありますけれど、山上の生活には此の蘆の湯が一番適してゐるやうにおもはれます。塔の澤や湯本は最も便利で萬事開化してゐますが、夏は暑くて、そこは今日では湯治場といふよりもお茶屋といふ方が當つてゐるやうです。宮の下、底倉、小涌谷は土地も可なり高く、凡てが便利で、且つ泉量も豊富で、清浄で、蘆の湯のやうな硫黄泉と異り、頗る入り心地も好いですが、私どもにはまだ山が低過ぎます。地勢が谷の底になつてゐるので、散歩するには、た

ゞ一と筋の街道よりほかに道はありません。それに比べると此處蘆の湯は箱根山の殆ど絶頂になつてゐるので、散歩道は自働車の往き復や国道の塵埃を避けて、山の背の到るところに夏草の茂みを分けて縦横に通ひ、細徑、茅萱の中に盡んとして忽ちまた開け、その道はやがて駒ヶ岳、神山の登道ともなり、或は新羅三郎の笛塚山に到り、或は山の背を傳うて小涌谷にも通じ、その昔し小田原北條氏の出城の舊跡なりしといふ鷹巢山、浅間山を経て城山、湯阪山を涉れば直ちに湯本に下る間道ともなり、双子山の裾をめくりて瀧坂といふを降れば舊東海道の畑宿にも達する。散歩道の變化ありて、窮まるところなき蘆の湯附近に及ぶところはあります。

私はそれらの山道を踏みわけて日々飽くことなく散歩してゐます。自働車は日に幾臺となく新開の國道を、大きな唸り聲を揚げて駛走してゐるま

すが、私はそれには餘り乗つて見たいとも思ひません。それから人車もありませんが私は山籠が箱根には最もふさはしい乗り物だとおもひます。蘆の湖の畔に岩崎家の山小舎風の西洋館が建てられ、深碧を湛へた山上湖の水のうへを發動機船が駛つてゐるのを見ても決して風景を破壊してゐるやうにも思はれませんから、草緑に氣清き此の箱根山のうへを文明の自動車走つてゐるとして、決して不思議にも思ひません、どうかするとそれが、最も適した乗り物のやうに考へられぬこともないではありませんが、自動車で乗つてゐる客は西洋人、車に乗るよりは勘定づくといふ打算から多勢で割込んだ無趣味な團體見物、一日二日ですぐ歸つてゆかねばならぬ急がしい人の飛脚旅行、一家族を連れだした金持ちの避暑客、わが物顔に藝者に乗せた旅の耻は掻きすての不謹慎な連中、さういつたやうな種類の人間が主にも自動車で乗つてゐます。

エムさん——帝國劇場や歌舞伎座の眩ゆき電燈の輝く廊下、それから三越や白木屋の華やかな呉服反物の山の中などに見る笑しく着飾つた婦人づれも、吾々の見る眼を驚かし、且つ歡ばしますが、山の上の温泉地、夏草の青く茂つた散歩通に往き交ふ美しい女連は一層清楚の感じを與へます。

他人の持物でも可いから、温泉地の散歩道にはぜひ美しい女客が歩いてゐなければ物足りません。どうかすると山籠に乗つて三挺も四挺もつゝいた足弱の女客、自動車などの往はぬ崎嶇たる舊道を急いでゆくところに出會ふことがあります。道々折り探つた草花などを籠に挿して、派手な中形に眞白い足袋の脚を窮屈さうに伸しながら、山籠の中に凭れてゐる新造、縮緬の黒紋付を被た年増、年とつて裕福さうな老婆、さういふのが通り過ぎると爽かな草木の香のする中に、ほうつとえならぬ懐か

しい化粧の匂を山道に残してゆきます。

枯木も山の賑ひ、まして古風な山籠に嬌かしい都の女客の袂のこぼれてゐるのは、この上もなき箱根路の賑ひです。

すると、また中にはそれよりもまだ古めかしく奥床かしいのは東京目本橋あたりの商家の妻女などと覺しく鮮かな友禪縮緬の蹴出しに、甲斐々々しい紐付草履、裾を高々と端折つて通つてゆく女づれも折々見られます。さういふのが蘆の湖の畔、幾百年の縁を誇る杉並樹の下路をゆくときに私はいつも廣重の繪を思ひ浮べました。箱根山はこれではなくてはいけない。

私はさういふ旅人の行き過ぎたあとをば、いつまでもそこに佇んで眺めるのでした。女の通つたあとをぢろく／＼眺めてゐるのぢやありません、その時の私の頭は廣重の繪を思ひ、昔の長い旅路を思ひ、遠い／＼

東海道の沼津や三島の方から山を登つてきた旅人。幾日か前に江戸を立つて小田原から双子山の裾を通つて越して來た旅人。其等が西に東に過ぎてゆく昔のさまを遠く溯つて繪のやうに思ひ浮べるのでした。

けれどもさういふ色めづらしい客の往復してゐたのも八月一ぱいで、九月になり、その九月もやがて末になつては、山の上は、堪へがたいまでに寂然して、浴客は殆ど退散し、双子山と駒ヶ岳とのみ常に變らず人界を鎮護してゐるやうに秋の空に峙つてゐます。私は、今はその山と雲とばかり眺めて日を消してゐます。けれどもまだ東京の空へ歸りたいとも思ひません。東京にゐてもどうかすると一日の中に風呂へ二度三度入りにゆくほどの私は、讀書と散歩とに飽きると、手拭を下けて、ぶらりと廊下づたひに浴槽に下りてゆきます。此處の温泉は前申したやうに硫黄泉で、下の方の温泉とちがひ時々濁つてゐて、硫黄の香がしますから、多

くの人はそれを厭がるさうですけれど、私には差支へないのみならず、その香が何といふことなく非常に懐かしく思はれます。宮の下や底倉あたりでは温泉場らしい香が立ちませんが、こゝは温泉場らしい懐かしい香が騰つてゐて、自然心が落着くやうに思はれます。それで偶には東京の賑かさを思ひ起さぬではありませんが、まだなかく山と温泉の香に飽きさうもありません。大抵の人は病人が何かでない限り三日か五日のたらしつと飽くでせう。中には見るところがなくつて詰らないところだなどゝ溢してゐるのをきゝますが、さういふ人達はよく／＼人間臭く出来上つた人間だと思ふ。活動寫眞や芝居が見たければ東京にゐるが可い、箱根山にきて寄席や芝居へ行つたやうに考へてゐる人は随分どうかしてゐる。東京の塵埃の中で朝暮そんな物ばかり見てゐるから、それで偶にかういふ青い山の上に来て、雲の徂徠や山の容などを眺めてゐるが好い

のである。……併しこんな講釋をしても、さういふ人達は、一口に仙人あつかひをして、ふゝんと笑つてしまふでせう。よく／＼人間臭く生れてきたものです。さういふ人達が得て自動車で急がしさうに駛らせてゐます……。

エムさん——私は、もつと／＼山を見てゐようと思ひます。尤も夏の中は此處にも怪しい講釋師がきてゐたり、田舎まはりの浪花節藝人が滞在してゐて、時々宿の廣間でやつてゐたやうですが、私は女中が案内してくれましたけれど、聴きにもゆきませんでした。敢て氣受つたわけでもないが、田舎にきて、いかゞはしい藝を見聞くのは堪へられない苦痛と不快とを覺えるものです。それに私のゐるところは帳場は別棟になつた、三四町も離れた広い庭の端に立つた一軒家だつたのですから、多勢の客の聴いてゐる中へ出てゆくのは、何だか年にも似ず、面伏せなや

うな気がしたのです。するとある晩のこと、まだ夜はさまで更けたといふほどではないが、客の減つた山の上の温泉場はもう宵のうちから寂しく静まつて、濕りがちな夜氣の中に、そこはかたなく懐かしい温泉の香が立ち迷つてくる折から、どこか遠くの方で、めづらしく新内の流しを弾いてくる音が耳に入りました。おや、折もをり懐しい三味の音がすると思つてゐると、その音は次第に耳ぢかく傳はつてきて、私の獨りゐるその一軒屋のすぐ籬垣の外に聞えました。流石に都會の繁俗を避けて、此の山の奥深くきてゐるながら、つい人なつかしい心地に堪えがたくなつて、女中に命じてそれを呼び込ました。やがて三味のぬしの入つてきたのを見る、それはまだ二十四五の若者で、淺黄つほい緞お召の羽織に派手な鳴海しほりの單衣を着て、色の淺黒い優形の、見るから旅路の夜々を新内の流しをひいて歩く藝人らしい風をしてゐますが、どこかすぶの旅

讀み來つて、短
ると好箇の温
る町に來つ
泉の去る客
ては、三味線
の委、先へ
を草枕、先へ
きから、先へ
と流し、先へ
樂師、哀の音
情、深き覺え
深い、人生の
深い、人生の

藝人とは思はれない身装風俗に、荒んでゐないところがあつて、口を利く言葉などはまことに濁りのない、それでゐる藝人らしい優し味のある生粹の江戸ッ兒でした。段々きくと彼は、つい吾妻橋の彼方なる本所表町に住んで、毎夜々々吉原を流してゐるのが商賣ださうでした。
それは懐しいといふやうなわけで、蘭蝶と三勝半七とを一つと條掛きました。その音にどこやら紫朝三加賀大夫との語り口をとつてゐるやうで、私はそゞろに東京のことなど思ひ出しました。彼は此の夏の初は東京から北の方の那須、塩原、それから草津、伊香保のあたりまで歩いて、一度東京に戻り、八月の初になつて此度は逗子、鎌倉から大磯などを経て十日ばかり前に箱根にきて、湯本では一晩と思つたのが、藝者などが、せひもう一と晩もう一とばんといふので三五日も足をとめてゐたとて、「お蔭さまで、方々でお客さまに聴いて戴きます。」と、いつてゐました。

いろく音曲のはなしをしたうへ、二上りをまた二つばかり聴かしてくれて、私のところを立ち出でました。

「こゝは、私一人きりだから、もつと本館の方に行つたら、客がゐるかあつちへ行つて見たまへ。」

といつてやりましたら、その方へ行つたらしく、頼りなげなる門づけの音色は再び静かな夜に高く低く、次第に遠ざかつてゆきましたが、その音殆ど絶えぬに聞えるばかりになつたかと思ふと、また少しの間やゝ間近に響いて、やがて、ふつりと止でしまひました。

その晩も宿の本館では浪花節があつたので、多くの客はそれを聴きに集つてゐて、新内は耳に入らなかつたのでせう。

「松坂に泊つてゐます。只今宮の下から着いたばかりのところでございます。明日は箱根の方にまるつて見やうかと思つてゐます。」

といつてゐましたから、翌日はきつと、その方に行つたでせう。一挺の三味線を草枕に、それを、一人寝の旅の友とも生命の綱ともして、さきから先へと、遠い旅にさすらふ若い江戸の音楽師の立つていつたあとを私はいつまでも思ひやりました。(六年九月廿八日)

女人堂

七年七月廿日 晴。

今日より土用に入りて暑氣いよく劇しからんとす。

今日K子いよく下山するこいふので、つとめて起きいでる。六時にはもう縁端の洗面所なる笥の水で手水をつかひ、身體を拭き清め朝餉もそこゝにKを送りて宿院の門を立ちいでたのは七時少し前であつた。今日中に大阪まで歸るのであるから、急ぐ途ではない。紺青に晴れ渡つた

碧空の、ミころぐに濛ふ雲の千切れ眞白く朝陽に輝いて美しいふばかりなし。轟々たる老杉の翠緑は透き徹るごとく紺碧の大空の表に浮き出で、見える。

私達は草鞋ばきの足軽く女人堂の前より花折り坂、稚児ヶ瀧、千丈落し、不動坂の難険を朝じめりの露けきオゾーンの香の濛ふ中を話し、降りていつた。女人堂は今甚く荒廢して俗了してゐるけれど、何となく往昔の偲ばれる處である。禁制の山法が尙嚴かであつた頃には、大師の恩徳を慕ひ、後世をたのむ女人がこゝ迄は來る事は出來ても、それから内へは入れなかつた。私は其等の衆生にさだめし色々なローマンスがあつたことであらうと思ふ。近松は『心中萬年草』でこの處を最も際く用ひて一つの舞臺にしてゐるのである。私達はそんな話を話しながら、久米之助の姉主従が暗い女人堂の後の杉の樹立の中で女の魂切の聲に驚き怖

遠き古の人の
姿と心とに著
者の思ひは移
つてゆくあた
り、優れた浪
漫的な事であ
る。

れて走り下つたといふ花折坂を歩いて降りた。大師草創以來千百餘年の間幾千萬に數知れぬ衆生の足に踏れた道の上には、老杉森々として烈日の光を和け、千丈落しの名古き溪の底には遙に水聲の響く音が聞えてゐる。道はかなり險阻であるが朝涼の降りなので、早く抄取り、知らぬ間に不動坂をも過ぎてしまつて極樂橋まで降りて來た。往昔は下界で罪を犯した者もこの橋を向うへ渡してしまふと罪が赦されたのである。重き罪業に汚れた者が浮世の俗念を絶ち、殊勝の心に返りて此の橋を渡つた者の數知れなかつた。平維盛、關白秀次なども恐ろしい心を抱いて此の橋を渡つていつたのであつた。そんなことを思つてゐるとこの朱塗りの橋が私には非常に陰暗な靈的なものにさへ思はれてくるのであつた。そのわたりは老檜生い茂りて晝尙暗いところである。私達は木蔭の濕つた道を歩いて尙ほ五六町ばかりゆくと、さしにも深い杉の林も盡きて、

向うの峯の尾には明い夏の日が禿山をまざくと照してゐるのが見渡された。お梅久米之助でローマンズの舞臺となつてゐる神谷の宿まで降りて来ると、もうそこは人間の世界であつた。Kと私とはその神谷の宿で袂を別たうとするのである。どこに休まうかこいひながら尙すこしの道の別れを惜みて歩いてゆくうち、どこまでいつても離別の情の盡きる折りはないので、宿の中ほどなる往來の掛け茶屋に腰を掛けた。そこから今降りたお山の方を振顧つて仰ぐと、老杉深く峰を蔽ふて雲を吞吐してゐる。また宿の彼方のKがこれから降りてゆかうとする尾根の方を眺め渡すと烈日の威を示すやうな光が樹木を採伐した禿山に漲つてゐる。河内と紀伊との境に連亘する葛城山脈が蜿蜒として遠く空を劃つてゐるのが見える。Kはその彼方にかへつてゆくのである。

「東京が遠く思はれますねえ。」東京生れのKは、さもく遠くへ来てゐる

るといふやうにいふ。

「さうだねえ。」

「いつ頃東京にお歸りになりますか。」

「僕は多分今年中は歸らないよ。來年も三四月頃までは伊豆、又は沼津あたりになる。だから秋の十月十一月には君また關西にやつて來たまへ。一緒に畿内の秋を觀よう。」

私達はしばらくそんな話を交換して茶を飲みながら別れを惜んだ。やがて

「ぢや、もう行きませう。」といつて、Kは立ちかけた。

「さうか。ぢや徐々行きたまへ。」

Kは効々しく尻を端折つて登山紀念の杉の白い杖をつきながら、とほとと向うに歩いた。そして五六間いつて、また一寸後を振り顧りつ

深い友情がこ
の短い一句に
よく現れてゐ
る。

つ、

「ぢや、これで。」と微笑を湛えていひながら此度は颯々と歩みを速めた。私はその後姿が、曲り角に隠れるまで目送してゐた。

私はまた獨りで杉檜の茂つた一里の急阪を頂上をさして戻つてきた。

高野山から

七月五日午後二時の暑い最中京都を立ち、奈良をへて、法隆寺驛の一次の大和の王寺驛で和歌山市行の線路に乗換へ、高田、御所、奈良、吉野口などの諸驛は、丁度二ヶ月以前五月の初吉野を見るまきに通つた道でもあり、その頃とちがひ強い日光が西と南とから車窓に直射して行くので、右手の窓は全部閉鎖して、葛城、金剛の翠微を仰ぐさへ物憂かつたが、吉野口を通過すると車道は次第に勾配になつて、金剛山裾山の

著者の紀行文
に獨得の妙味
あることは故
三宅恒方博士
も説いて居ら
れた。その一
面がよくこの
一章にも現は
れてゐる。

車窓に映る風
物が躍如とし
て描かれてゐ
る。

峽谷を左右に翠巒を仰ぎつゝ進んでゆく。右窓から行く手の山腹に高く人家の點在してゐるのが見えたりする。やがて吉野口が四時餘の車程を馳せて山麓の寒驛北宇治といふに着く。そこまできると千早城址のある金剛山はすぐ西南里餘の空に西に春く夕陽を山背に浴びて、全山虹のごとく煙つてゐるのが仰ぎ見られる。

北宇治の次驛は大和の五條。茲は吉野川の流れに添ひ、鮒漁をもつて名高きのみならず、町を東に出はづれて吉野街道をゆくこゝ三十三町。吉野川の清流を前にして古刹學品山榮山寺といふが建つてゐる。私は五月に吉野にいつた時には吉野川を樂しみ眺めた。吉野ステーションを出で、六田の渡を向岸に渡り、吉野の山に登つてゆく車の上から遙に振顧つて山麓を繞る清流の靜かに黄昏れてゆく状を見渡したのも悪くはなかつた。上流に沿ふて群がって居る般賑な上市の町の白堊が次第に夕昏に

没しそめるに共に早くも遠くの川ぞひ一體に電燈が瞬いて見えたのも懐
 しかつた。けれど私はまだ吉野川を見足りながつた。もつとよく吉野川
 を眺めたかつたのである。吉野の歸途わざ／＼その上市に寄道をして晝
 食をした時に妹山背山を見たり、遠くの川上から流して来た筏のかゝつ
 て居る淀を眺めたけれど、そのあたりはまだ水量が少くつて汪洋とした
 趣に乏しかつた。それが下流の尙ほ五六里をゆく間には自然に水量も
 増すはづである。何や斯や、海から遠く山の中に入つた、この川ぞひの
 五條の町には一晩泊つてみたかつた。

汽車は北宇治を出るに金剛山の裾野を一瀉千里の勢ひをもつて、大きな
 圓の一部を畫くやうに迂回しつゝ直に吉野川流域の低地に向つて駛せ下
 る。やがて五條に着いたのは午後の六時過。長い夏の日はまだ全く金剛
 山の彼方に没し切らぬとおもはれて、暑い日ざしが停車場のブラツトフ

オームに咲いた夾竹桃の紅の花を明るく照らしてゐる。

赤帽がゐらないので車夫を呼んで重い手荷物を運ばしめ、座敷から川の
 見晴らされる静かな宿屋へ。「こいへば、車夫はやゝ考へつゝ、

「丁度えゝところがごわかります。そこへゆきまようか。」こいつて、轆棒を
 上げ、ステーションの前から一三條の街道を右折すると暫くして又左に
 折れながら急な阪路をたらく／＼降りてゆく。そこを降りてから五條の町
 の家並は次第に整つて、郵便局や神社のお旅所のあるあたりから、殆ど
 一と筋の町ではあるが、大阪や京都などの大きな都會にあるやうな入口
 の大きな呉服屋が並んでゐたり、仕舞屋づくりの店頭に磨き格子の簞つ
 た十間もあるやうな大きな間口の家があつたりする。きくと其等は何
 れも林業や鑛山を営んでゐて、この町で屈指の豪商で、縣下でも有数な
 金持ちであるといふことだ。車夫は五條は奈良について縣下の殷賑な町

であると話しながら歩つた。そんな町が開けてゐるにもかゝはらず、汽車が遠くから吉野川の流域を展望しながら初めステーションに入つてくる時には、何處にその町があるか分らないくらくら、五條の町は、金剛山脈の裾野が遠く吉野川の低地に到つて陥落してゐる處に立つてゐるのである。

やがて車夫が轆轤をおろした家は、あまり泊客のなさゝうな古風な寂れた宿屋であつた。先刻停車場で車に乗る時、つくづく私の様子を見てゐた車夫は、ほかにも料理屋兼業の藝者など出入りする家はいくらもあるが、そこは騒がしいのみならず、私の最初の註文の川を見晴らす處でないといつて此家に連れて來たのである。しかし後で大阪の學校にいつてゐるといふ宿の息子の語るころによれば先月縣下に衆議院議員の補缺選舉のあつた時、大養毅氏が應援に來て、「この間丁度大養さんも此の

二階座敷から眺めた風光が手にとるやうに描かれてゐて、その邊一帶が懐しい氣がしてくる。

部屋にお泊りになりました。」といつた。私は大養氏を平常あまり崇拜せぬ方であるが、地方の崇拜者であつたら、さぞ光榮に感じたらうとおもつた。併しその部屋は大養氏の一晩をこゝに明かすにしては餘りにいぶせく寂れてゐると思つたが、息子の話では縣下でも特に黨争の激しい土地だといふ、この町の有志家が天下の名士外交調査委員なる國民黨總務大養本堂先生の御旅館として此の家を選定したのは、先刻の車夫が、商賣柄熟と私の風俗を見てこゝを選定してくれたことなどを思ひ合はせ何か好いところがあるのだらうと思つて安心してその座敷に旅衣の塵を拂ふこゝにした。

家は吉野川の広い河原の岸に臨んで、高い二階座敷の濡れ縁から畔を放つて展望頗る廣濶で、水は川幅の三分の一位のところまで向岸の藪疊について流れてゐる。長い土手の藪を越したすぐ彼方は野原村といひ、

それにつゞいて吉野川流域の村々が尙ほ遠く開けてゐるさうで、竹藪の上を、上流の方から下流の方まで屏々として連亘してゐる遠くの山麓までは一里を行かねばならぬ。左方の山脈の上に少し許り淡藍色の顔をのぞけてゐるのが、吉野から大峰につゞく山脈で、畿内ではこの大和の南半を占めてゐる吉野郡の全部に蟠屈する大峰山脈、即ち大天井ヶ嶽から山上ヶ嶽、佛經ヶ嶽、釋迦ヶ嶽につゞく連峰が一番高い。中でも佛經ヶ嶽は高標六千三百尺に註せられてゐる。

更に眸を右方に轉すると、明日、これから上らうとする高野山麓の翠微が望まれる。五條の次の驛二見といふところに行くと、そこへ今向うに見えて居る藪のかなたの山の裾を丹生川といふ一支流が流れて来て會流する。其川上、こゝから二里ほど南に行つたところに吉野朝の賀名生の行宮址がある。後村上天皇の暫らく移りました所である。町の背後に

自然に愛着を
持つ者のみが
味到し得る三
味境である。
人間の尊い心
境である。

は川の縁まで遠く裾を曳いて來てゐる金剛山が屹然として聳えてゐる。

遠い歴史の昔を懐憶したり、山河の自然を心ゆく迄凝乎と眺め入ると、私はひとりでに云ひやうのない旅情の湧き上つて來るのを覺えた。それは寂しいながらも天に謝するやうな楽しい、甘い感情であつた。そして猶ほ飽くことなく廣濶な眺望を恣にしてゐるうちに、遠くの峰續きも、向ふの竹藪も、水の流れも、廣い磧も次第に暮靄に罩められてやがて同じやうに暗い單色の底に影を没して了ふと、高く晴れ渡つた大空には今にも降つて來さうな夏の夜の星が瞬きそめた。私は心小兒の昔に返つて獨り無心にそれを數へてゐると、數へれば數へるほど、星くづは、その數を増してきた。そして丁度高野山のあるあたりを思ふ方から暗い大空を斜に東北に渡してゐる銀河が夜とよもに其光を増してきた。懸崖に凭つて架出した涼臺に膳を持ち出して名物の鮎の饅や塩焼で夕

飯を済ますと、息子を案内に町を散歩して、吉野川に架かつた板橋を歩いて見た。戻つて来るともう青い蚊帳の中に白い布で包んだ軽い寢床がこしらへてあつたので、私は遣る瀬のない旅愁を感じながらも、又何んもいひやうのない安らかな静かな心持ちになつて、何物にも心を勞せらるゝ氣づかひもなしに床に身を横たへると思ふ間もなく、いつしか深い睡りに陥ちたのであつた。

翌朝眼を覺すと、近ごろ不思議に心地よく熟睡した一夜であつたことを何よりもまづ意識して、元氣旺盛の感が體中に充ちた。昨日寢るときに少し明けて置いた、障子の隙間から涼しい朝の風が川の面から流れこんできて、青い蚊帳を揺すつた。

「さあ、これから音無川の榮山寺を見て、今日高野に登るんだぞ。」と思つて、起き上つた。(七年七月高野山にて)

野峯日記

七年七月十五日 雨

午後より夜に入りて大雨。

あまり閑静で寂しいせるか、またすこしく神經衰弱で、勉強が出来ない。八月になつたら大阪あたりから多勢避暑客が押掛けるといふことだが、まだちよつと早いので、自分のゐる奥書院などはガラ明きである。十畳三間つゞきのほかに尙ほ幅一間の疊廊下をすらりと取りまはしてある寛瀾さ、自分は、その東の端の一と間に通されたのであるが、はじめて来た時玄關から方丈の長い薄暗い廊下を傳ふて、右に折れてまた上段の間の脇の長い廊下からこの奥書院に入つて来たとき、いかにも高野の寺らしい伽藍とした閑かな氣分にもなつたが、實はどの部屋もあまりに大

居は心に移す
といふ言葉が
生きてくる。

きいので、出入りにそこを通るのが薄氣味悪い。上段の間の大床には大師四十二歳の御時の厄除の尊い繪像の掛ものが飾つてある。智徳圓かに法の親と後世の衆生から敬ひ尊ばれる方なれど、薄暗い大きな床の間に人間ほどの大きさの御像の胡粉を塗つた白いお顔が奥深い座敷の中に、出入りの度、眼について何だか生きてゐるやうで薄氣味わるい。院主は目下不在で五六人の寺僧、納所、雑僧、給侍など皆庫裡の方に寝ね、會下(門長屋のごとき二階座敷にて、いづれの寺にもあり、白壁づくり、漆喰を施したる堂々たる建物にて大抵八間九間から十間の大座敷を有し參詣の檀信徒の客室に充つ。會下の稱の起原は師の下に會合する學徒のゐるところといふごとき意味より起りたるものらしく、いづれの寺坊にても野山大中學林に學ぶ學生の宿坊に充てられてゐる。には防神あたりから學生が四五人避暑してゐるが、それは奥書院よりは最も隔たりて話

凄味を描いて
迫眞の興味が
ある。

聲さへもきこえず、庫裡に通ふにも方丈の長い廊下を渡らざるべからず、見上げるやうな高い天井の十疊三間つゞきの奥書院に自分獨り孤座してゐるので、幅四尺の大襖に打突つてはたくと小さい音を立てつゝ夏の夜の燈火を慕ひ來る蝶々の羽音にさへ神經突りて、夜蔭に乗じて怪性の物でも忍びよつたのではないかと思つて、私は時々脊に水を浴びたやうな心地で凝乎と音のする方を見返るのである。そこへ以て來て此の間金剛峰寺の本堂を拜觀して、關白秀次の自害した柳の間といふの一見したところ、襖は狩野一家の妙技になつたもので、雪の積つた柳の枯木に寒空を眞白い鷺の飛んでゐるのが、顔料の胡粉の色、思ひ做しに如何となく凄愴の調を帯び、私の惱ましく疲れたる神經は、深夜夢寐の間に成の「雨月物語」を取りいで、めづらしく「佛法僧」の一章を讀みしに、

果して秀次の亡靈顯はれるところあり、自分も先夜大師廟に参詣し、燈籠堂、靈廟など拜みたるが、あの時渡りたる玉川に架せる無明の板橋を、かたくと鮮やかに足音を立て、秀次が前驅の若侍の前を追ふ聲嚴めしく、荒かに踏みわたりて来る氣配が雲をしのぎて寂び茂けれる老杉の木下暗にこだましてゐる。夢然の秋成は燈籠堂の養の子の上に雨具を敷いて座を設け、閑に念佛をしながら夜の更けゆくのをわびてゐると、それが聞えてくるので、夢然父子は息を殺して、そちらの方をじつと潜み見てゐた……

寂然とした奥書院の夜、燈火の蔭が廣間の無地の大襖に幽な隈を描き、あまり部屋が大きいので床の間や袋戸棚、違ひ棚の隅々が一入薄暗くなつてみえてゐる。私は獨り居の夜深々と更けゆくとともに倍々神経が鋭敏になつて、またしては燈火を慕ふて来る小さい蝶々の白襖にばかりと打

つかる音に思はず慄然とさせられる。

回廊の裏手にある便所に立たうとして歩いてゆくと、そこには幽かな電燈一つがぶら下つてゐて、廊下の向うの方が厭に薄暗い。秋成が奥の院で見た秀次の亡靈がそこにも影をさしてゐるさうである。日頃既成の宗教を信するよりも若々しい科學を信仰する自分であるが、此處は高野山であるといふことが、始終念頭に膠着してゐて、此の山の草木泉石悉く靈ならざるはなし。高祖大師の遺法も廢れ、七里の結界今はた解けて酒肉女人の境内に入ること夥しいが、千百年の長い間いろ／＼の人の心靈上の問題を取扱つてゐた道場であつたと思ふと、秀次の怨靈や維盛、灌口などの煩惱も奥の院にゆく道の空を蔽ふた物凄しい杉の古木に今尚ほ纏はりつゝいてゐるやうな氣がする。

何だか秀次が祟つてゐるやうで安眠熟睡が出来ない。そして夜中に眼

を覺ましながら、恐ろしいばかりでなく少しは遊び氣があつて、この心持は後日何かに書けるなどと思つて頻りに寢反りを打てると、明けやすい夏の短夜はもう東の方が微白を呈してくる。それでやゝ安らかな氣分になつて、もう亡靈も出はしなれと思つてゐると、やがて院々の朝勤めの梵鐘が、あちらでもこちらでも東明の空を劈く如く鳴り響いてくる。遠く離れた庫裡の方で人の眼覺めた氣配がする。すると心は倍々安らかなになつて、やがてまたうとくと寢足りない夢に陥つてゆく。

この五六日、どうもさういふやうな状態で日夜を過してゐると、來ないかと云つてやつた衣が東京からもう數日前に大阪までは來てゐて、いつでも上つてゆきますといふ葉書を寄越してゐる。それが、もう今日あたりはやつて來る時分であると思ひながら、食後の體を横へて新聞を見てゐると、

「やあ。」といひながら、給侍の子供を案内に廊下づたひの襖をあけて顔を出した。尻を高く端折つて小風呂敷を腰に結び付けてゐる。

「やあ。この雨によく上つて來たねえ。」といひつゝ、私は起上つて、香ばしい川柳などを手づから煎じてすゝめながら、過ぐる四月二十九日の朝八時三十分、關西に向つて出發する汽車の窓で話して以來のいろくんな雑話に積る無聊を消した。夜に入りて急雨の音がますます物凄くなつた。

秀次の亡靈見たり柳の間

秀次の化けてゐるさうな雪の鷺

山

私は山が好きである。そして登つて見るのよりも適度の距離を置いて

著者の山岳趣味は飽迄詩人的であり、藝術的である。淺草式、見せ物式の登山熱を痛罵し去る處うがち得て妙である。

都市生活に對する嫌惡の情は讀む者をして首肯せしむるところが多い。

遠くから眺望した方が好ましい。ひとつは不精で、脚弱で、高山に登攀することを難んずるせるもあるが、身軽しく高山に乗つたのでは、其等の山々に對する美しい幻影が破壊される憂ひがあるからだ。私は今日、年をおうて盛になつてゆく登山熱を好ましいことゝは思ふが、少くとも私自身は餘りに脚下に山靈を蹂躪しない積である。眞實に山を樂み山を愛づるならば稍々山と離れてゐることである。山を樂むがゆゑに山に登るといふは、暫らく私の所見によれば、それは山に對する世縁趣味である。講談趣味である。甘い趣味である、また實質趣味、俗惡趣味である。畢竟その高山を自分の踏臺にして朝日の昇るのを拜んだり、廣濶なる遠景を展望したりする爲である。その場合自分の今踏まへて立つてゐる山容の美觀は全然度外視されて、唯單に望樓として實質的に利用されてゐるに過ぎないのである。山靈を侮辱するもまた甚だしいと云はねばならぬ。

尤も遠景に眺めた山容麗姿に憧がれ、懐しみたる結果一層それに接近してみたく思ふのは止むを得ざる人情であつて、私は必ずしも非難しようとはしないが、少くとも私は衆人の爲す如く、それに倣うて山靈を蹂躪し、折角の美しい幻影を破壊するに忍びないのである。

私の山を樂むは、その山容の嵩高雄偉なるにある。その突兀巍峨たるにある。その肩背の斜線の壯麗優美なるにある。その裾野の廣濶なるにある。夏草の茫々として緑の波を打すにある。遠くより眺むれば雲霧として得も云はれぬ色彩の變化に富み、やゝ近くよりこれを仰げば翠巒眉のうへに落ちかゝらんばかりなる一種の險しい氣分にある。

私はさういふ意味に於て山を好む。パイロンのいへるごとく山は偉大なる感情である。恰も海が偉大なる感情であるごとく偉大なる感情を抱

山が偉大なる感情であるこ

とを説いて、
山も亦様々な
表情を持つと
いふところ、
人間の弱小を
笑ふところ自
然と融合した
筆致である。

いてる。・けれども山の抱ける感情は海ほど動揺してゐない。極めて沈
静である。私はその沈静をも好む。かくの如き沈静にして偉大なる感情
を包み、高く雲表に聳えたる巨軀。その着けたる衣の色は時としては濃
藍色、時としては淡藍色、時としては桔梗のごとき薄紫、或は翠緑、
或は眞鯉の背のごとき墨黒色晴雨によつてその容貌或は沈鬱ともなり、
或は快濶ともなり、或は甚だしきセンチメンタルにもあり、或は非常
に女々しくもなり、或は英雄のごとく男性的にも返へる。フランス革命
思想の先驅者テイチローは一日の中に卅八遍とか、その氣分によつて容
貌も變つたといふが、高山の容貌はそれにも優りて一日の中にも千態萬
様の變化を示すゆゑに心して之を仰ぐときは山は自から語らざれども、
彼は常に非常に複雑にして且つ急劇なる旋律に富む音楽を奏してゐると
も聽かれ 淺俗なる人間の俳優が市塵層々たる巷に演ずる喜悲劇の如き

は到底此の崇高なる感動の與ふる興味には比ぶべくもない。

私は今東京の生活に飽いてゐる。東京にも金を自由に持つてゐるなら
ばもつと、私の知らない、味ふことの出来ない興味ある生活があるかも
知れぬ。あるに違ひない。けれども其等は程度をこそ異にしてをれ、大
抵私どもの知り得た様式の生活を出でまいと思ふ。人との交際にも或
は自己に慰安を與へるものがあるとも、その多くは好ましからぬ刺
戟や昂奮や、配慮を與ふる場合が多いのをおもつて、それに大分飽いた。
況や吾等の日常の生活が既にそのごとく煩瑣と係累の多きに堪へざらん
とする上に尙ほ何を苦んでかその煩累を二重三重にもして演劇の類を觀
んとはするぞ。私は到底その煩はしさに堪えないのである。

然るに自然の造り成せる山岳の鎮坐せる雄偉の形貌と、古の名工の造
れる優秀なる建築の様式の類とのみは人間界の煩瑣に惱まされたる私の

神經の痛苦と焦燥を按摩してくれるのである。建築のことはしばらく措き、唯自然に對してゐる時のみ單り私は最も多く心樂む。而してその自然とは特に山靈を指していふ。

私はそんな山岳の形貌色彩及びその表はせる泰然自若たる力を愛し尊ぶのであるけれど、未だ足跡の到る範圍が極めて狭いので従つて全國の著名なる山靈に親しむことが甚だ少いのは遺憾であるが、これから追々せかず急がず一生の間に其等の山々を見て歩かうと思ふ。

そしてその天下の名山を憶がれ思ふにつけて私の常に忘れることの出来ぬのは谷文晁の描いた日本名山圖繪である。文晁の山岳圖繪は一見今日の洋畫家が描いた山に比べてひびく誇張に失したり、科學的見地を逸したりしてゐるかのやうに思はれて、本來繪事に暗い自分なごは初はそれを侮蔑しやうとするやうな心持になるが段々彼の描いた山をよく見て

いつてゐると、いかに文晁が一つの山をも決しておろそかには見てゐなかつたといふことが、自分がその山をよく見れば見るほご、即ち山の表はしてゐる觀景の各部分に曉通すればするほご、文晁の山を知るこごの深く且つ委しいのに感心するのである。

廣重が主として平野の自然に徳川時代の市民の生活とをよく觀てゐたことは今更いふまでもないが、勿論彼は山なごをもよく見てゐる。私は今年の一月箱根のある骨董屋で、廣重が、小田原酒匂あたりの渡船場から函嶺を見たところを描いたものを見たことがあつた。初めそれを手にこつて一瞥した時には、いかにも昔の畫家が陥り易い誇張に失してゐるとおもつて、やゝ侮感を生じたのであつたが、その山の輪廓のあまりに多角的にして、鋸鬚と谿谷の變化があまりに繁多と思つたのも、その賦彩のあまりに赭土色であつたり、或は茜色であつたり、或は藍紺に過ぎ

たり、或は淡藍であつたり、又は峰の重疊せる具合なきが餘りに數多すぎると思つたのも、筆の奇抜なるについ眼をひかるゝまゝ思はず畫面を熟視しておいて、後になつて底倉の温泉宿の二階から段々黄昏れてゆく早雲山や神山の支峰なきの夕陽を浴びてゐる色彩や、深く抉つた谷合に蒼鬱と繁茂した灌木の茂みの眞黒にかき暮てる有様なま、不斷はそんなにも思つてゐない山の皺が夕映えてゐるところと、ゐないところとで明暗の區劃をはつきり浮きだしてみせてゐる。その時私は先刻誇張に失してゐるとおもつて侮蔑の感を起したのは、やつぱり自分が廣重ほど山を深切に鑑賞してゐなかつた所爲であると分り、私はひとりで心に恥ぢ、同時にこの昔の名家の注意の周到なるに感心したのであつた。

谷文晁の名山圖繪がまたそのまほりである。最初一瞥した時には、それがひびく誇張されて描いてあるとおもふが、實地に就いてその山を度々

谷文晁と廣重の藝術が誇張でないことを説いて遺憾がない。

視てゐると、いかに此の昔の名家が深切に、そして十分の興味と好奇心と愛樂の精神から熟視してゐるか、自ら肯づけてくるのである。

さういつても不精にして脚弱で且つ萬事思ふにまかせぬ私は文晁の描ける其等の山々をば、親しく汽車から降り立つて見たのは極々少いのであるが、それは將來の希望として、これまで稀に接近して仰いだり、または汽車の窓から覗いて遠く眺めたりしたところによつてみるも、それはよく分るのである。廣重が酒勾の渡しのところから見た函嶺も眞實の函嶺なれば、また文晁が描いてゐる、須雲川の谿淵の上に双子山が二つ双んで顔を見せてゐる箱根嶺の圖繪も眞實である。

足柄山の突兀とした眞黒な山腹に白雲が搖曳して、右方の峰との間の谿底に一段一段石を築き上げて出來てゐる山田、中央のやゝ低い峯の山腹に人家の群つてゐる有様なま、西洋畫家の科學的な遠近法からいつ

たならば山と山との大小の比較がとれてゐないといふ非難も生じないこととはないが、全景に對した刹那的印象的な觀察から或はさう看取されることも全然ないとは云へない。何となれば、客觀的存在も半ば主觀の氣分によつて組成されるのであるから。——さすればそんなに誇張された、整はない部分のあるのも、偶以つて畫家その人の觀察奇警なことを語るものではないか。

富士山を主題として描いた圖繪には愛鷹山は通例吾々が最もよく眼馴た一角を描いてゐるが、ひとりその愛鷹を主題にして描いた圖繪では吾々の乗つた汽車が少して沼津に着かうとする黄瀬川あたりから眞正面に眺めた山の、全姿を寫してゐるのである。不精な吾々はそれを唯汽車の窓から眺めるのであるが文晁は沼津の方から眺めてゐるから裾野に松原を配してゐる。

近江と美濃との境上に峙つ膽吹山も私には懐かしい車窓の樂しみである。近くの田圃の手前から遠くの村里の彼方に眺める巨大なその姿も眞景である。近畿の名山では、三上山、比良、比叡、愛宕、六甲、摩耶、いづれか眞景を寫さぬはない。

木曾御岳の、諏訪湖の水を越して遠く雲表に秀でたる、駒ヶ岳連峯の屏々として、中仙道を俯瞰して立てる、木曾路の關門を要して峙つ美濃の惠那岳の英姿、伊勢の朝熊山の優しき、山城の笠置山の遠景、奈良の春日山の蒼鬱たる姿、大和平野の五所街道をゆく馬子と、もに遠く望んだる金剛山、葛城山、私はその金剛、葛城山下の平野をこの五月から二度まで汽車によつて往來した。一度は吉野にゆく時、此度はこの高野山に登らんとして。

遠く峯の尾の長くつゞいた、馬の頸のやうな處に丁度、龜の如く立つた

杉の林と一目千本の櫻とまざつたところに家居の群がつてゐる吉野山、その吉野からまだ六里の山奥なる金峰山の巍峨として腰に雲を纏へる、いづれか私の興味をそゝらぬものはない。

私は今、高野山に来てゐる。今日は汽車や電車の便が出来て、登拜の人々は殆どすべて大阪汐見橋から通じてゐる高野登山電鐵によつて橋本から、又は王寺和歌山線によつて高野口から所謂京口即ち不動坂口を経て登ることゝなつたが文晁の時には多分紀州粉河から花阪を経て登つたのであらう。その高野山の圖繪を彼はどの方面から描いたか、私は一昨日高野口から登つて来て、山の尾根によつてゐる神谷を通り越すとその切りさほしのはづれから初めて高野山の翠巒を眉端に仰ぐことが出来た。高標漸く三千尺に過ぎない山ではあるが突兀とした剣尖のやうな峰に杉檜が猪でも棲むかとおもふばかりに鬱然密生してゐるを見た。

文晁はその森々たる老杉巨檜の間に金剛峰寺の堂宇の屋根を見たところを描いてゐる。

若し夫れ越中の立山の剣を植ゑたるごとく奇峰林立せる、九州の彦山の危峰雲を踏み累々層を成して重疊せる、島原の温泉岳の有明灣の帆船を俯瞰しつゝ天に向つて嘯ぶける、阿蘇の煙、霧島の雲、其等は私は實景を見ないから文晁の圖繪がどれだけ眞景を寫してゐるか分らないが、他によつて類推するところ眞實に違ひあるまいと思ふ。

讃岐の屋島は、野州の男體山の比較的雄偉の觀を成さぬに反して實景以上に雄偉である。併しそれも強ち誇張ではない、視點によつて丁度こゝんな觀景を備へてゐるのである(七年七月高野山にて)

伊賀伊勢路

元祿の俳聖芭蕉に傾倒せる著者の生活、旅を空想して枕頭に地圖を展くあたり脱俗高邁な人格がよく描かれてある。

私には、また旅を空想し、室内旅行をする季節となつた。東京の秋景色は荒寥としてゐて眼に纏りがない。さればとて帝劇、歌舞伎さては文展などにさまで心を惹かるゝにもあらず、旅なるかな、旅なるかな。芭蕉も

憂きわれを淋しからせよ閑古鳥

といひ、また

旅人と我名呼ばれん初しぐれ

ともいつたが、旅にさすらうて、折にふれつゝ人の世の寂しさ、哀れさ、またはゆくりなく湧き来る感興を味はふほご私にとつての慰藉はない。東京は、私には、あまりに刺戟が強く、あまりに賑かすぎて、心はいつも皮相ばかりを撫でゝゐるやうである。東京にゐると、文筆のわざさへひたすら枯淡なる事務のやうになつて、旅にゐるときのやうに自然

の情趣が湧かない。私の魂魄は今、晩秋初冬の夜々東京の棲家をさまよひ出で、遠く雲井の空をさして飛んでゐる。

私は府縣別の地圖を座右に備へて置く。そして毎夜就寢のとき枕頭にそれを展いて見るのである。哀れ深き旅の空想は私の夢をつねに安からしめる。富士の頂きに初雪を見る頃になつて、さすがに夏は懐かしい。東北の山河は、私には思ひ浮かべるだにおぞましい。南海、西海の邊土は未だ多くわが脚を踏み入れたことはないが、須磨、明石さへ遠隔の地のやうに思つた昔の京都の殿上人の抱いてゐたやうな感情は私にも遺傳されてゐるとおもはれて石炭の煙突煙る九州の地は私にはあまりに遠國すぎる。私の最も愛好する地勢と風土は伊賀大和近江の境にある。そのあたりの地圖を閲しつゝ私は自由に旅の空想を夢むのである。此度の旅は少くとも二ヶ月くらゐはさすらすら豫定でそのつもりで旅支度をととのへ

些の未練もない東京の空には暫時の訣別を心の中に告げつゝ夜九時の急行車で中央ステーションを出発する。此の時停車場の大廊下に鳴りひびく旅人の下駄の足音も私の耳には天樂の如くいみじき音律となつて聞えるのである。それより心地よいクシヨンにまづ腰を落着けつゝ今宵一夜を共に此處に明かすべき同車の旅の人々の知らぬ容貌風采、さては一步想像を深めて、それ等の職業、運命なきについて考へてみるのもまた一興である。此の際に於ける私の注意の働きと、想像の奔放なることは、到底歌舞伎座や帝國劇場なきにあつて死劇を觀てる比ではない。

やがて夜行列車は、寢つきつする間に翌朝の午前六時を少し過ぐる頃無事に名古屋に着く。私は昨夕東京を立つとき伊賀の上野までの乗車券を買つてゐたので、そこで關西線の湊町ゆきの二番が發車するのを待つ間二時間ばかりに軽い朝食を取つたり、電車を利用してちよつと名古屋

屋の街の一角を窺いて見るであらう。實は多年の宿望なる、關ヶ原、古の不破の關所のあつたあたりのわびたる野山、村里の秋景色をも歩いて見たいのだが、それは今は割愛して豫定のとほりに、やがて湊町ゆきに乘つて午前八時二十三分發で伊勢路に向つて旅をつゞける。

桑名、四日市は昨夕の残睡のうちいつしか通りすごして、車道は漸うく四山の群がる間をわけ登るに、冬近き空の氣色定めなく、鈴鹿は雲に隠れて、嘘のやうな時雨がはらくと窓を打つてきた。行方なき風雲の、先を急ぐ旅でもないので、かういふ日にこそ廢驛を眺めわびたいとおもつて、待夜の小室節關の小萬で名の高い關の驛で汽車を棄てる。まだ十時半過ぎたばかりなので早い。

今夜はこの處に一夜逗留して見たいと思ふが、名匠狩野元信が、いくらか巧に描いても繪は到底自然生えの杉の美しさには比ぶべくもないと浩

歎を發して繪筆をとつて、投げ捨てたと傳へられる筆捨の溪も遠くはない。殊に此のわたりの杉は自然を見る眼の常人に卓絶してゐた審美眼を感動せしめたも無理からぬほごに美しい。それで停車場の車夫に掛合ひつゝ、有名な地藏尊は歸途に残して、まづ筆捨山に向ふ。時雨れて濟むほごの雨ならば、行々かの恐ろしきローマンズの傳はる阪下より昔の鈴鹿峠を越えて、江州に入り、「阪は照るく」鈴鹿は曇る。あひの土山雨が降る。「てふ郷曲の風情を一人旅の身にしめながら土山までのり、その晩は遂にいぶせき旅籠に夜を明し、翌日は尙ほ三里の道を水口までのき、貴生川を経て汽車を利して柘植に廻り、そのまゝ上野に出るか、或は土山より昨日の道をまた關に戻るか、それは其時の心の赴くまゝになし、再び名古屋、湊町の線路にたよりて左方の車窓に崢嶸たる靈山寺山、長野峠の錦繡を遙に送迎しつゝ、やがて伊賀の國境に入れば、春ならば黄白

の菜の花薫る上野の盆地遠く展けて、收穫濟みたる野の果て、落葉しくれる山の際に、戌亥の方に白壁の土蔵を置いたる農家の冬待ち顔に靜かに立つを見る。佐奈具の一驛をへてやがて上野に着く。此地は芭蕉翁故郷塚、伊賀越の敵討で名の高い鍵屋の辻なご心を留むるかたぞ多し。私はいこゝに一夜二夜を明し、翁のことどもを忍びつゝ俳人ならぬ俗人の俗腸を洗ひ、

今宵たれ吉野の月も十六里

と翁も云はれしとほり、かねて假りの住居の望みなる吉野も程遠からねばそれより大和街道を志て名張に向ふ。ところへは俵を下りて、車夫を勞はり、ひろい歩きして、南畫に描かまほしき秋の山々の黄葉を拂ふ風に旅衣を吹かれつゝ、そのわたりの溪山の眺めは私をして容易く立ち去りかねしめるであらう。(六年十一月二日)

大和路

その時もしすぐ名張にゆかないで伊賀上野から名古屋湊町線を、そのまゝも一つ先の島ヶ原驛まで行くのもいい、汽車の窓から見てみると、雑段のやうな山田が一つひとつ緩い傾斜面に重なつて、やがて小高い丘の上までつゞいてゐる。そしてその頂には、背後に杉檜の鬱蒼とした高い山を控へて裕福さうな農家が三點五點立つてゐる。草葺屋根の母家に續いて白壁塗の土蔵があつたりするのが眺められる。春ならば山田の畦に青草が萌えて、長閑な春暖に桃の花が咲きこぼれてゐたりする。

東京や大阪京都の繁華な都會を遠く離れて、あの丘の上の人達はこんなところに何を樂み、何を考へて一生を送るであらうといふやうな小さな心が想像せられる。自分もあんな丘の上に居を構へて、暖い春の

日光に浴しながら、縁側に寝轉んで、遠い東京の喧騒を餘處に聞いているたら、みんなに神経が鎮まるであらうといふやうなことも考へられる。

一體に伊賀、大和、南山城の境域に連續してゐる山容水態は、さこの溪谷に入つていつて見ても小さく纏まつて、南畫なまぎによく見る如き雅致を具へてゐる。

吉野川上流の溪谷、吉野の奥。名張川及伊賀川の溪、宇治川の奥ことごとくさうである。私はその名張川の溪と伊賀川の溪とを最も好む。月ヶ瀬の梅の美は半ば溪山の美に在る。鎗の穂先を連ねたやうな峰の杉林と、雑段をいくつも重ねたやうに溪の底或は丘の傾斜面に小さい畦によつて仕切られて開墾されてゐる山畑とを背景として、農家の茅屋と相點綴して早春を告げてゐる風情にいひやうのない桃源境の長閑さ静けさがある。梅がある爲に月ヶ瀬の名夙に天下に冠絶すれど、其實溪あるが爲に梅

著者が優れた
紀行文家であ
ることはこの
一篇を讀むと
それが強く感
じられる。

の名が高いのである。既に然りとすれば、私は二月の花無しと云へども此わたり秋景山水の美を棄てるに忍びないのである。

私は、或は伊賀上野から伊賀川の溪谷に即いたり離れたりしながら、笠置街道を俾で島ヶ原の方に行くかも知れぬ。その道には西蓮寺などいふ寺がある。島ヶ原にも観音提寺と云ふ寺がある。また初め志した通り一旦名張までいつて、そこから大和の方に越えないで、そのまゝ名張川の溪谷に添うて月ヶ瀬の方に下つてゆくのも楽しい。名張川は大和の宇陀郡に源を發してゐる宇陀川と、やつぱり宇陀郡の東部伊勢境の山岳地方から流れ出で、伊賀に入り名張町に到つて宇陀川に會流する河内川なごの水を合せて伊賀大和の境をなすつゝ北流して二度大和に入り、月ヶ瀬の溪を成し、更に北流して南山城の大河原村に到りて伊賀川に會し、直ちに左折して西に向ひ、笠置山の北麓に沿うて笠置、五軒屋、加茂、

木津などの市邑を経て木津川となり、南山城の平野を灌漑しつゝ更に北流して淀に到つて遂に淀川に合す。

私はこの名張川の溪を好む。月ヶ瀬か、ごごか、不便をしのびつゝ此の川沿ひの小さい町に逗留して見るのも一興である。或はずつと下つていつて大河原驛に暫時ゐて見るのも可い。その上流月ヶ瀬の下流二里許兩岸の峰々が削立してゐる間に高尾、廣瀬などいふ村があつて、粗朶などを積んだ小さい柴舟が山と山との迫つた清瀬に懸つてゐたりする。

伊賀の島ヶ原から汽車で來ると、伊賀山城の國境に可なり長い隧道があつて、それを西に出抜けると、丁度近江と山城との國境をなしてゐる大谷の隧道の入口よりもまだ險阻な峰がすぐ頭の上に聳え立つてゐて、深い杉に蔽はれてゐる。その勾配の急な山の根もとの處に大河原の停車場がある。そこまで來るご名張川はすぐ向の山と山との間を分けて急瀬

春雨に濡れた
川舟、舟中の
客、宛として
一幅の繪畫の
趣がある。手
堅いうちに艶
麗な味のある
文章である。

を成しつゝ流れ出てゐるのが注意深い眼には必ず見落されぬ。田舎の停車場で宿屋なきも不便であらうとおもふが、そのわたりの溪山の眺めは箱根の山北あたりの山のやうに粗野散漫でなくつて、纏りもよく、雅趣に富んでゐる。停車場があるので東京を遠く離れてゐても、さまで心細くもないわけだ。歸りたくなつたら、すぐ汽車に乗つてしまふばかりである。もし飽かなかつたら、いつまで居つても可い。汽車は大河原まで次驛の笠置との中間あたりに一つ鐵橋があつて、それより以西は南岸の険しい棧道を走つてゐる。笠置驛には礦泉がある。そこまで汽車でゆくのもいゝが、船で下ると更に妙である。三四年前の四月の末であつた。私はそこを汽車に乗つて奈良の方に志してゐた。すると、その時日は照つてゐるながら、温かい春雨が降つてゐた。兩岸に巨岩が怪石迫り、紺碧の淵を湛へた急流を一つの小舟が溯つてゐる。長く纜を挽いた一人の

男が磊々たる岩の上を飛んだり這つたりしながら上つてゆく。舟の中には一人の男があつて、下流の方から横降りになりかゝつてくる雨をよけ乍ら紺蛇の目の傘を阿彌陀に翳してゐた。それへ、稍々西に傾いた春の日影があかるく照りかけてゐるのを見た。

笠置の驛は丁度南朝の遺跡を以て有名な笠置山の麓に位してゐるが、村は水より北の對岸にある。汽車から見ると、そこはすぐ背後の山に據つて家居が出来てゐて、上の方には寺の高い蔓なごも見える。それから尚ほ流れについて下り、加茂驛のあたりまでゆくと、もう川幅も廣くなり、向岸には野が開けて、春には眞青な麥畑が煙霞の立ち罩めた中に夢のやうに遠くつゞいてゐる。(六年十一月二十日)

添乳物語

追憶文學として上乘なものである。この一篇を讀過してそゝろに幼時のことを思ふ。

これは私の極々幼い折の經驗を遠く想ひ浮べて誌して見るのである。世に幽靈變化のたくひが眞實に存在するものであるか、否か、それは知らぬ。私はたゞ、私の幼い時に遭遇した些かな出來ごとを述べてみるだけである。

一體私は極めて幼い時分、怖ろしいながらに幽靈の話が好きであつた。それも唯一つの幽靈の話であつた。私は毎夜暖に母の懷に抱かれて夜具の中に横りながら、またしてはその同じ幽靈のはなしを促して母にして聞かせてもらつた。

それはごごか、あまり遠からぬ村にある飴屋があつた。するとその飴屋へ近頃毎晩日の暮れ方にごこの者も知れぬ女がいつもきまつた刻限に飴を買ひに来る。そして毎時きまつて六文づゝ買つてゆく。飴屋の主人は初めのうちは氣がつかかなかつたが、毎晩日の暮れ方にきまつて買

ひに来るので、ごこの者であらうと段々不思議に思ふやうになつて、ある晩飴を買ひに来たのを、歸つてゆくあとを密と蹤けてゆくと、その女は村はづれの墓場に入つていつて、とある新墓のところについて、ふいと形が消えてしまつた、飴屋の主人は不思議に思ひつゝ、なほその墓のまはりを探してみたが、たしかにその女はその墓のところまで消えて無くなつたに違ひない。で、そのことを檀那寺の和尚さんに話して、ともぐにその新墓を掘り返してみると、穴の中に頭髮を振り亂して白い着物をきたその女がゐる。赤兒に飴をしやぶらしてゐた。女は身持ちのまゝ死んで、そこへ埋葬されたが、棺の中で男の兒を生み落したけれども、自分はまだ死んだ者であるから乳が出ないので、毎晩飴を買つてきてその兒にしやぶらしてゐたのであつた。六文の錢は、死んだ時に、持たしてやる三途の川の渡し錢のあの金をもつてきて飴を買つてゐたのであつた。

それで檀那寺の和尚さんは、よく幽霊の女に云ひ聞かして、お前は安心して死になさい、此の兒は私が引取つて大きくしてやるからといふと、幽霊はそれに安心してその後出なくなつた。その男の兒はお寺に連れてきて弟子にして坊さんにした。その坊さんは今でもまだ生きてゐて、大變に知識の高いお坊さんであるといふことだ。

「倉のお爺つあんなごは、そのお坊さんを見て知ておるんぢやといの。」母はまことしやかに、いつもさういつて話して聞かすのであつた。倉のお爺つあんといふのは、私の幼いころ酒造をしてゐた私の郷家の酒倉の杜氏のお爺をさういつて呼んでゐたのである。そのお爺は赤本軍紀のたぐひが好きで、年中酒倉の大爐の傍に跼座をかいて、暇さへあればそれを讀んでゐたものである。私の幼少の頃は、その爐傍に漾うてゐた夢のやうな淡蒼い煙の中に見えるローマンスの世界に向つてまづ私の稚い智

識の初歩が開けてきたのであつた。その頃の私には赤本や軍紀に書いてあることが事實さしか思はれなかつた。母が眞實な聲で、その幽霊のはなしをして、「倉のお爺つあんは、そのお坊さんを見たこゝがあるんぢや」といふので、その物語は一層實在性のものになつて私の耳に入つた。加之それには私の幼稚な想像も加はつた。死んだ者が三途の川の渡し錢に六文の錢をもつて行くといふのも、私の地方の習慣で、死者を葬むる夕暮れ、村はづれの道端に膳のうへに卒塔婆の形に切つた白い紙片を立て、そこへ一厘錢を六つ並べて置いてあつた。私は母から、死んだ者が、その錢で三途の川の渡し錢にするのださきかされてゐた。そんなものを眼にふれてさへ私の幼稚な心は名狀し難い怖れと陰暗な感情に襲はれたのであつた。その穢い古膳の上にある六文のお錢を想ひ起して、私はそれを以つて幽霊が飴を買ひに来るのも、さうありさうなこゝだと思はれ

た。それから幽霊がいつも暮れ方暗くなりかける時分に來るといふのも子供心に首肯された。私には、一日無心に遊び騒いだあとで、日暮れになつてわが家に歸つて來る時ぐらゐ寂しい氣持ちのすることはなかつた。「蜻蛉つり今日はごこまでいつたやら」あまりに遊び呆けて家路にかへるのを忘れてゐると、祖母は心配して何處までとも私を迎へに來た。私は祖母に迎へに來られて、連れてゆかれるのが、他の遊び友達の手前何だか弱蟲のやうできまりが悪いのであつたが、仕方なしに祖母について戻つてきた。

さういふ日の暮れがた、黒く朽ち腐れた村中の草葺屋根の軒端のきは陰氣な夕暗が被ひかぶさる時分になる。いつも子供の寄り集ふ道傍の遊び場なごから歸つてきながら、此の村に古くから云ひ傳へられて、化け物の出る場所になつてゐる大きな柿の木の下だの、晝間でさへいつ

も眞暗な土小屋の前なごを通るごきには、私はそこだけ駆けぬけた。すると小屋の中から薄氣味の悪い陰濕な風が後から追掛けるやうに襟頭にしみ付いて、眞暗のところから大入道がぬうご出て來るやうに思はれた。私は自分の驅けてゐる草履の足音がさも私を追掛けて來る化け物の足音のやうに思ひなされた。その二た處ばかりではない。六十戸にも足らぬ草深い私の村里には、暗い雨の降る夜人間に化けるといふ大きな椿の樹だの、夜提灯を下けて通つてゐたら何か出てきて手を窺けて蠟燭を取つたといふ繩手道だの、子供が油揚げを買つてくるごころを浚はれたといふ藪だの、いろんな寂しい處が多かつた。私はさういふ場處を通らねばならぬ時に、みんなに臆病な胸が脅かされたか知らぬ。

小川を一つ隔て、川向に特殊部落があつた。身に襦袢に纏ひ頭髮なごをおごろぐしく振り亂した塙なごが日の暮れる晩方こちらの村へ夕餉

の買ひ物なごにきて小川の土手に添ふた藪蔭の墓地の中の細徑を歩いて歸つてゆくのが何とも云へず私の稚心に薄ら寂しい乏しなげな印象を與へてゐたのであつた。母から添乳物語りにその幽霊が飴を買つて歸るここを聞かされたとき、私の幼稚な想像はその幽霊の姿を特殊部落の婦の姿に結び付けて考へさせた。するこそその幽霊がさうしても本當のものゝやうに思はれるのであつた。私は暖かな夜具の中にもぐりながら母の體にひたと寄添ふて墓場の地の底で棺の中で赤兒を愛しながら飴をはぐくましてゐる幽霊の面貌をまざぐくと想像に思ひ描いた。するとその棺の中だけは何だか明いところのやうにも思はれて、その幽霊の母親が懐しいものに考へられるのであつた。それで私は添乳してもらつてゐても、さうかして快よく就眠かれない折なきには「のう、あの幽霊の話しをして！」

といつて、よく請強んだ。するこ母は「またあの幽霊の話しをせい云ふのか。お母さん、もうあの話には飽いた。」といつてゐる、がそれでも私がせがんで止まぬので、母は仕舞にはまけて、また幽霊の話をして聞かせた。すると話してゐるうちに、母の言葉は自分でも次第に興が乗つてくるらしく、段々眞實のやうに思はれて、私は温かな、安かな心持に溶けながら、凝乎とそれを聞いてゐるのである。

それは私が六つから七つ八つ時分のことであつたらう、私も次第に成長して學校にゆくやうになつた。そして添乳に聞かされた幽霊の話しにいつとはなく興味を感じぬやうになつた。私はそれを思ふこゝ、頻りにその頃の幼時が懐しく悲しい。

やがて私は十一二になつた。その頃私は自分でふと不思議な變化に出會したことがあつた。それから三十年を隔つ今になつても、私はその恐

しかつた瞬間の明かな記憶を尙ほ忘れることができぬ。

それは、ある年の秋の夜のことであつた。私の村里では昔時からの習慣で一年に三度のお日待が執行はれてゐた。春と正月との時には普通の人家で祈禱があることになつてゐたが、秋の時だけは氏神の社殿でそれが行はれた。その神社といふのは村里からは十町ばかりも離れて北の方の山裾によつたところに鎮座してゐるのであつた。そこらは山の浅い處であるが、それでも宮は官有林になつてゐるくらゐで、大きな樅や松の老木なさが鬱蒼として晝間でさへ暗く密生してゐた。

冬、木枯しの吹き荒ぶ時分になつて、小鳥なごを捕るために、よくそこの野山に遊んでゐるこ、亭々として天にも達くかと思ふやうな、奇怪な幹の形をした高い松の樹なごが一本だけ雑樹林の中に立つてゐるのが、ざあと凄いやうな音を立て、風に吹かれてゐた。今から憶ふこ、そ

れは丁度狷介孤獨の巨人が社會に容れられず世に迫害せられてゐたかのやうな感じがする。我達は屢々その孤松の幹根に寄り添ふて幹に耳を押付けて、強い風が、見上げるやうな枝葉を揺り動かす音を聴いた。蒼空は高く澄んで、雲の断片が松の葉越しに驅けてゆくのが見えた。宛然蛟龍の絡り付いてゐるやうな大い赤松の枝はみんな風威にも屈しないといふやうに、蜿蜒として空の半を蔽ふてゐた。その大松にはまた太い藤蔓が高いところまで絡みついてゐて、嫩い枝葉の枯れ果てた幹のみが、ざらり／＼木枯しに吹き捲すられてゐた。私達はさういふ風力と樹々との相剋する壯觀を仰ぎ見て喜んだり、怖れたりしてゐたが、その老松は間もなくお宮を改築した時に官林を拂ひ下けて用材に伐倒してしまつた。新しく出来たお宮はたゞ明るい感じのするところになつてしまつたが、改築以前の古い宮は名もなき村社ながら境内は晝さへ薄暗く、いとど神

寂びたところであつた。

いつぞや、これも母から聞いた話しに、今はもう年を取つたり、死んだりしたものもあるが、村の極道者が五六人その古い宮の炊事所に夜な夜々忍び込んで賭博を打つてゐた。すると、ある夜のこと草木も眠る丑満時宮のお庭の中に白い衣服を着たものが出てきた。彼等はひと眼それを見るや否なや流石の極道者も一度にワツと聲を立て、疊に顔を伏せてしまつた。やゝあつて恐る／＼顔を上げながら息を殺してその方を凝眸と見るに、白い物はやつぱり立つてゐて、さうつと動いてゐる。一度は吃驚りしたものゝ、いづれも血氣ぞろひの若い者のことゝて、尙ほもその方を見守つてゐると、その白い物の頭には三本の蠟燭が灯されて、髪はおそろしく振り亂し、やがて庭の中のとある立木の下にいつて、薬でこしらへた小さい人形に釘を打ちつけてゐる。それを見て極道者の連中はや

つと白い物の正體が丑の時詣りと知れることは知れたが、それでも慄然としてしまつて、氣味が悪いので、その夜は到頭そのまゝ賭博もせず、一處に寄り附いて寝ることもならず、夜の明けのを待つてゐたといふ。その時丑の時まるりをした女は私の村里とは五六町も離れたところの宿の者であつた。

「あれは宿の源藏のお婆だつたといふことぢや。」どうかしてそんな古い話しが繰返される時には、斯ういつて今はもう七十を越した皺だらけの婆の若い頃のことが語られた。そんなことはあるものではない、それは炊事所で賭博を打つたりするのを氏神さまが叱られて、そんな物に化けて、その連中を脅かされたのであらうなどいふ者もあつたさうであるが、

「宿の源藏のお婆も今のやうにあんな婆さんではなかつたから本當かも

知れん。何でも炊事所の戸の間から窺いて見たのでは、源藏の婆さんの若い時の顔に違ひなかつたといふことぢや。

母はさういつて、よく附加へてゐた。

その物語はまた、私に、そのお宮を一層恐い場處にしたのであつた。で、話しが前にもどつて、秋季のお日待ちの夜であつた。その晩は信心の篤い者は銘々夜具などを一枚づゝ持つてお宮にまゐり、遅い夜食がはてゝもそのまゝお通夜をして一夜を明かすことになつてゐた。私達子供は、ただ、夜廣い拜殿の間に多勢で寝ながら蒲團を引被つて狸寝入りをして見たり、本當に寝てる如のところに入つていつて蒲團を引剥いだり浮戯けるのが面白ろくつて堪らないので、そのお日待ちの夜を幾日も前から折を折つて楽しみ待つのであつた。

その晩も私達は夜おそくまで浮戯けられるだけふざけて漸く黎明にな

つて少しの間だけ前後も知らぬほどぐつすり寝入つて、私はふと眼を覺ました。そして小用を足さうとおもつてそつと、ひとり起きいでながら、拜殿からつゞいてゐる繪馬堂の方に降りてきて、昨夜、間違へられたり、穿いてそのまゝゆかれたりせぬやうに縁の下の奥の方に隠しておいた草履を取らさうとすると、果して誰れか穿いていつたと思はれて、自分の草履が失せてゐる。ほかに誰れかがあつたら穿かうと思つてそこら中探して見たが一足も見付からぬ。夜の最も長い時分のことゝて、椀や松の被ひかぶさつた間に境内の眞上のところだけ少し透いて見える天が鉛白色にやゝ白みがゝつてゐるのみで、四邊はまだ薄暗く、古びた繪馬堂には佐々木高綱の宇治川を乗切つてゐる大きな額や源の頼光の頭を兜のうへから嚙り付いてゐる恐い怖い、毛髪を振り逆立てゝゐる大江山の鬼の彫や、佐倉宗五郎の一代記を描きわけてある圖など、いろんな繪馬

の掲つた天井の隅々などは漆を流したやうに眞黒で、いつ見ても裏はれるやうに恐い印象を残してゐる宗五郎が燦刑になつてゐるところや、幽霊になつて出てゐるところや、大江山の酒香童子の顔などは、白い胡粉の顔料のところだけ微白く私の方を凝視めてゐて、そこから宗五郎や酒香童子が脱け出して來さうに思はれる。雨氣を含んだやうな濕つた風が撫でるやうに冷たく襟頸のまはりに泌みついて、私はその薄暗の中を裸足のまんま彼方について、こちらに來たり、唯々々々々々としてゐると、小用ばかりでなく大便をも催うしてきたので、境内を取廻はした低い塀の外の森林の中にある便處にゆかうと思つて、裸足のまゝ堪へ々々恐るゝその方へ出てゆくと、すぐ後の山についた叢林の中から、がさぐたと音々させてふいと白犬が顯はれた。私はもうそれで赫と全身の血が一時に頭に上つた。けれどもその白犬は、私の子供の頃初は何處の家で飼つ

たともなく、わが村に居ついて、私の知らぬ、何時のころからか長く村を彷徨つてゐる温順な年とつた雌犬で「白々」で通り、何家のうちでも可愛がられてゐた。その「白」がふいと出てきて私の傍に寄つた。私は吃驚りさせられて舌打ちをするほど腹が立つたけれど、對手が犬で素直に傍に來たまゝ黙つてゐるので、どうすることも來ず、そのまゝ大便を耐へながら、小便もせず急いでまた拜殿の方にもどつてきた。と、もう、よく眠りこけてゐた子供達も皆な起きてゐて、當夜の世話方にいひ付つて昨夜の夜食に握り飯を盛つた澤山の諸蓋を下の川に洗ひにゆくのだといつて、手々に肩のうへに擔いだり、提けたりして持つて降りてゆくところである。其等は大抵私よりは二つ三つ、或は五つ六つも年長の小若い者も交つてゐた。私は裸足のまゝどうしてゐることも出來ぬので、「ぢや俺もゆかう」といつて、多勢にまじつて、境内から木立ちの中の阪

道を二町ばかり降りたところに流れてゐる小川の岸に出てきた。川には大きな土橋が架つてゐて、それを向うへ渡ると櫻を澤山に植えた馬場があつて、やがて田圃の道を村里の方へ來るのである。小川には水が減つて、山手寄りの方は一面小石の白礫が出來てゐて、やゝ深い水のついてゐるのは向岸の櫻の馬場の石崖の方であつた。私はまだ裸足のまゝであるので石河原を涉つてゆくこともならず、そのまゝ土橋の橋袂に立てゝある大石に凭れて悲しさと恐しさに氣が脱けたやうになつて、ほんやりと佇んでゐた。

ほかの子供は、その間に多勢でがやぐいひながら、河原の石のうへを傳うて水のある方へいつてしまつた。そこらは恐ろしいやうな大きな松や樅の立つてゐるほかに下生が鬱蒼と繁茂してゐて、どちらを見ても、まだ眞暗である。そして山の裾を廻つてゆく細い樅がたつた一と

筋深く森林のある方へと入つてゐるのである。その方は一層奥ぶかく暗くなつて見えてゐた。

私はもう何うしやうかとおもつて、たゞ恐さ一つに喪心したやうになつて慄へながら暗の中を凝視めて突立つてゐた。するさ、それは私の神經の作用であらうか、狐狸の仕業であるか、それとも他に變化といふものが眞實あるものか、或はその夜お通夜に籠つてゐた村内のどこかの女房衆でもあつたか、そればかりは、——三十年を隔つ今でもその時のことを明歴と記憶してゐる癖に、そればかりは分らない、——その眞暗な樅徑の中から確かにチャラリ〜といふ雪駄の足音がして、背の高くない黒い物が、

「おほ〜、おほ〜。」と、笑ひながら私のゐる方へと近寄つてきた。その聲は、ほやけたやうな聲でありながら、嬌めいた、神經を嚇やす

やうな聲であつたと思ふ。それをきくと私は殆ど氣絶せんばかりに、頭から水を浴びたやうな心地になつて、

「わあッ！」と汚い聲を揚げて泣き叫びながら。一生懸命に土橋を向に駆け渡つた。十四五間の橋をどう渡つたか足が地に附いたことは覺えられなかつた。そして向へ渡ると橋袂から馬場へ飛びおりて、向岸の石崖を這ひさがり、私の下腹のところまでとどく水の中を、着物を高く巻つて、石河原で洗ひ物をしてゐる仲間のところへ渡りついた。そのとき土ばしを渡らずに多勢のゐる方に行かうとすれば、背の低い黒い物の方に向つてゆかねばならなかつたのである。多勢の子供は、私が不意に氣立たましい喚き聲を出したものだから、「どうした、何うした？」と口々に云つたが、私が彼等の傍にいつて、今来た物のとを話すと「そんな物が居るものか。」と、一應は疑つたが、それでも私が確かに居つたに違ひない、橋

の下手の方に出るかも知れぬ。」と言ふので、彼等は磧の小石を手々に拾つて、まだ眞暗な河原の上下へ其處ら中カチ／＼投げて見たが、それきり何のこともなかつた。何處かの女房であつたら、子供がそんなに騒ぐのを見て名乗つて出ぬ筈はない。果してそれが私の神経の作用でなかつたとすれば妖怪變化の類はまこと存するものか、どちらにしてもこれだけの事實は明に私の記憶に残つてゐる。(大正六年十月十四日)

冬の日かげ

今年の陽氣はあんまり好い方ではなかつた。夏は六月の中に早く猛威を呈して、七月中照りつゞけたと思ふと、八月土用あけの頃から秋冷を催して九月にかけて毎日々々雨ばかり降つて、これでは今に非常な天變でもない限り此の雨は止むまいと思つてゐると、果してあの通り十月

四季の風物を
精細に描く著
者の筆は堂に
入つてゐる。
病弱である著
者にはそれが
痛く感ぜられ
るのであらう

一日の夜に無数の人畜を傷ふやうな暴風雨や海嘯があつた。今年も、さ
ちらかと云へば悪年であつた。ところが十一月に入つてから十二月にか
けて不思議に美しい麗かな雨が續いてゐる。殊に十一月の月なき、祭日
や日曜日と云へば意地わるく定つてよく降る雨が、不思議に日曜日とい
ふ日曜日がいつも好い天氣ばかりであつた。自分なごは日曜日も祭日も
ない閑人であるが、心持ちよく晴れた小春日に會ふたびに天道眞に人を
殺さずといふ感が深い。

赤城神社の大銀杏の樹が黄葉するのは、年毎に私の樂しみの一つであ
るのだが、それが此の秋は十月の暴風のために、大半葉を吹き千切られ
てしまつて、日に幾度となく外出のたびに仰ぐ癖のついた眺めも、徒
に無残に傷つけられた姿を留めるに過ぎなかつた。

けれども私の部屋は尙ほ秋の關色を見るには眺望を缺かなかつた。北

著者の生活の
一面を窺ふに
恰好な隨筆で
ある。友人と
の會話なども
面白く書かれ
てゐる。

に向いた此の高臺の窓からは江戸川の低地を一帶に見下して、その向う
には小石川の高臺と相對してゐる。すこし體をのして、窓から覗くと西
は遠く秩父の連山の霞、脈々として美人の眉の如く匂やかに、高田、維
司ヶ谷あたりの杉の森は蟲々として碧空を摩して立ち、目白の丘は音羽
の谷を隔て、小日向久世山のテーブル、ランドと續き、氷川から大塚の
方の低地で燃く工場の煙であらう、靜に晴れた空に煤煙が緩く騰つてゐ
るのも長閑である。小日向の丘には殊に櫻と松の樹が多く眼につく。春
ならば、遠く此方から眺めると、一圓樹の色が淡紅色に萌え立つてゐる
と思つてゐると、二日三日つゞけて吹く生暖い南風に其等の樹々は忽
ち白く花を開いてしまつて、あはたしく騰揚する紅塵と、もに嵐に搖
れて騒めいてゐるさまが見える。

その櫻が秋には丘を黄褐色に彩取つてゐるが、それもいつしか凋落し

て、今は真正面に輝きわたる暖かな冬の日を浴びた家々の縁側に乾す蒲團の紅の色やシイツの白きまでが露出して見えてゐる。

私の窓のすぐ外には年古りたる櫛と椀がいつれも二三本づゝ立つてゐる。これも暴風の爲に大分枝葉を傷めつけられたが、大半残つてゐたのが黄葉して一日いちにち散り落ちてゆくのに何とも云へない佗しさが味はゝれるのであつた。金色に漲り渡つた照る日のかけに、あるとも思へない微かな風が立つと、脆くなつた其等の無数の葉は、丁度飾にかけて振るやうに、からりと音をたてゝしつきりなしに斜に落ちてゆく。さうかした微風に加減でその褐色の葉は私の窓の中に飛び込んで來ることもある。やがて一葉残さず落ち盡してしまつたあとの樹梢は針のやうに細い尖端まで露はれて、蒼く澄み切つた碧空の表にくつきりと網の目の如く透いて見える、此の頃の打ちつゞく好晴に午後の長閑な冬の日が、眼

を遮るものなき江戸川低地に立ちつゞいた人家の白い障子や黄色い羽目板なごは麗々と輝いてゐるのが眼に入る。私はこの寂びた、落着きのあゝる、静かな冬の日の色を好む。十一月の二十六日、その日は殊に晩秋の美しい日であつた。朝から微風だに動かさず、ほつかりした日の輝く遠くの高臺や近くの人家にも一日薄い霧が立ち澄んでゐた。夜になると一層陽氣は穩かになつて、折から十月十二日の月は處々に絨のやうな薄白い雲のかゝつた天心に照り輝き、誰れか好い話連れでもあるなら何處までとでも歩いて行つて見たいやうな晩であつた。私は下町からの歸途にいつも其方に出ていつた時の習慣として、ここかで夕飯を認めやうとおもつたが、まだ空腹を覚えぬので、そのまゝここへも寄らず牛込まで歸つて來ると、ふいといつか一度いつて見たい食べ物屋を思ひ起したので、そつちへまはり、二時間はかりして歸つてくると、丁度二時間ばかり前

T氏とN氏が訪ねてきたといふ近頃二人が訪ねてくれた時にいつも折悪く私は不在である。併し多分近所のK屋へ夕飯を食べにいつたのであらう。そのうち歸途に立寄るかも知れぬと心待ちにまつてゐると、果して一時間ばかりして二人が廊下から聲を掛けながら入つてきた。

私のところへは、餘り訪ねてくる人もないが、女中が到來の郵便なごを持つてきて襖をあけてさへ、すぐ靜かに落着ひてゐる心を脅かされがちなので、一種の軽い脅迫觀念から、常に廊下に向いた襖に「面會謝絶」と書いて貼つて置くのである。それだけでも、やゝ安泰を感じる。が、かねて女中に命じて、木戸を開放して置く訪客が三人ばかりある。それはTに、Nに、Nである。此の三人はさうかすると、偶にやつてくる人達であるからだ。

いつも私と三人寄ると、話しが弾むのであるが、殊にその晩は種々な

話題について雑談に耽つた。文學談。女はなしが、後には幽霊の有無といふやうなことにまでつゞいていった。N氏のいふ幽霊といふのは科學的幽霊だとT氏は評したりした。私は、僕は幽霊は好きだ。何となく懐かしい、そして自分は幽霊に化けて出なければならぬことがある。人に残念な目に合されたら、化けて出てやる。併し、自分は人に對して幽霊に化けられるやうな罪なことはしてゐないから、恐ろしいことは無いと云つたりした。そして私もTも先月の帝劇の「お夏清十郎」の梅幸の扮した衣川の幽霊は好かつたといふやうな話をした。

それから化けさうな女のことをいつて、T氏は、家の妻は化けないと云つたり、N氏は家の妻は化けると云つたりした。三人ともそれについて觀察が一致した。

火鉢につぐ炭火は圓く眞赤に熾つて、六疊の室には煙草の煙が淡蒼く

籠り、話は興を生じて、江戸川の低地を軌る電車の音も絶えなくであつたのが、それさへも、もうはたと音が仕止んでしまつたとおもつてゐると、あれほご静かであつた外氣が、風が出てきて、窓の外の櫺と椶がざわ／＼と音を立てた。

遠方にゐるT氏は、殊に氣にして時々聞く耳を立てゝゐるが、それも一時を過ぎて、二時近くなると諦めたやうに度胸を振盪して落着いてしまつた。やがて「さあ遅くなつた。」といつて、兩氏はやをら腰を持上げた。その夜は夜通し樹木に觸る風の音が聞えて、古びた窓の戸の隙洩る風が獨り寢の衾の肩先から透入つてゐた。それでもぐつすりと熟睡し、翌朝十時ごろ寢床の中にもぐ／＼してゐると、また廊下へのつし／＼といふ足音がして、昨夜のTN二氏が入つてきた。T氏は到頭N君の家へ泊つたのであつた。

幼時の追憶を描いた文章の中でもこの一篇の如きは稀に見るの名文である。

順 禮 歌

「これから、K屋へ御飯を食ひにゆきませう。」

N氏がいふ。T氏は私の机に凭つて、ある地方の新聞へ送る續き物を一回書いた。それが濟むと三人は外へ出た、外は昨夜から吹きつゞいてゐる寒いさむい風が街路に荒れ狂ふてゐた。(六年十二月十九日)

山里に咲きわびてゐた櫻も漸う散りそめて、野には青い麥が聳て人の脊も隠す程に伸び、菜の花の黄も末がれてゆく頃になると毎年きまつたやうに私達の村々から小豆島巡りといふものが出掛ける。

小豆島は、あの美しい瀬戸内海の水が備前と讃岐とによつて狭められてゐるその東端の海上に浮んでゐる周回僅に三十五六里にも足らぬ小島である。島は風光明媚。そして弘法大師の開基といひ傳へられてゐる。

る八十八箇所の札所があつて、晩春初夏の頃になると對岸の中國や四國から數多の順禮が日日渡つてくる。

私わたしがその小豆島めぐりの順禮じゆんらいの一行いっけいに加つたのは、もう今から二十三年も昔のことである。小豆島めぐりといふことは、それがいつも季節の好い時分であるのを背景として、過去の懐しい無邪氣なローマンスとなつて私に残つてゐる。やつぱりその頃であつた。毎年春秋の時分になると阿波から人形淨瑠璃が瀬戸内海を渡つて私達の中國の田舎にまで旅を興行して歩いた。いろ／＼な外題をして見せたが、最も子供心に哀愁となつて記憶に残つてゐるのは阿波鳴門順禮歌といふのであつた。一體私は添乳の歌 聞くころから常に父の語る淨瑠璃を聴かされてゐたうへに、母がまた西國遍路といふやうなことに妙に憧憬を持つてゐて、彼女は私を連れた笈摺姿の二人を、丁度芝居なごでみる順禮の親子のやうに

空想して遙けき旅にさすらひたい願望をもつてゐたのである。それを私に度々話してゐたのを記憶してゐる。

母のその空想は遂に實現されなかつたが、小豆島めぐりは、いくらかそれに近いやうなものであつた。それに、その前のまへの年の秋母は私達の父を亡つて後生をねがふ心が強くなつてゐた處へ、またその年の一月 早々私の兄に死なれたので、母はひゞく無常を感じる様になつて、遁世的な考から一層西國行脚を欲して、たとひ旅に死ぬ様な事があつても厭はぬから、一日出家した以上は其儘永く行方へ晦まして俗世の縁を絶ちたい程の志がないでもなかつた。

すると小豆島へはもう數十度もまゐつたといふ親類の老人が、今年もまた島めぐりをするから一緒にゆかうではないかといつて誘つてくれたので、母は私ともに出掛ける氣になつた。私も兄の死は、前年の父の死

管笠を冠つた
母と子の西國
巡禮に旅立つ
姿を目に見る
やうに描いて
遺憾がない。

にもまさりて哀傷の情がひそく胸に響いて、それがために少からず體にも障つたやうであつたが、執拗な感胃から動もすれば肺尖カタルでも起しさうな徴候さへ見えて熱の高低があつて食欲も進まなかつた。それで醫者に島めぐりのことを相談すると、醫者はひそく賛成して、少しくらゝる熱があつても出掛けることを勧めた。島山には、もうそろそろ麥が熟しそめる時分であるから、私は暑くなれば漸々皮は剥ぐやうに一枚づゝ脱ぐつもりで、單衣を三枚重ねて家を出た。

脊に笈摺こそかけなかつたが、頭には西國八十八ヶ所順禮同行二人と誌した管笠を冠り、手甲脚絆に身を向め、納め札を胸にかけ、金剛杖をつきながら村はづれの板橋を渡つて、海のあるところまで三里の道を、野を過ぎ山を越えて歩いた。ところづくに蓮華の花の毛氈を敷きひろけた野は見渡す限り薄い絨を張つたやうな眞白い霞が立ち罩めて、五月の日に

暖められた軟かい風は眞青な麥の波をわたつて吹いて來た。山路をゆくとして度躑躅が眞盛りに咲いて、慵いやうな草木の蒸息れる中からもう夏を魁けるやうな松蟲の鳴く音が騒々しく山中に響いて聞えた。そして小高い山の頂を一つ向へ越すと、そこにはまた山と山との間に狭い野が開けてその野の中を流れてゐる小川に添うて下へしもへ下つてゆくと、やがてその川が海に流れ込む川口のところに行の先達なる親戚の老人とはかねて馴染の船頭が小い和船を用意して私達の來るのを待つてゐるところであつた。そこは瀬戸内海の水がまた、無數の小島の群つてゐる間を分けて陸地に添うて幾曲りかしながら深く灣入してゐるところで、長いゆく春の日は海岸の小山の彼方に春きかけた夕映を身に浴びながら私達同勢七人はその小舟に乗込んだ。舟はまるで小い池にでも浮んでゐるやうな穩かな波の上を、夕暮れかゝる暗をわけてぎいぐといふ櫓の音

瀬戸内海の風光を印象的に、無駄なく描いてゆくあたり、著者の筆を偲ぶ。

ともにも静に滑つていつた。そしてその夜は丁度對岸の山の上にある大師堂に夜籠りをして狭くらしい庫裡で脚絆と足袋を取つたばかり、着物もそのまゝの假寝をして、翌朝早曉大師堂の山を下りてくると、そこには昨夕からそのまゝ山の下に船を繋いで夜泊してゐた船頭が、もう苦を取除けて、私達の降りてくるのを待つてゐた。そこから十里ばかりの海を小豆島へ渡るのである。

四月の末からかけて五月頃の瀬戸内海の水の美と氣候の穏和などは一度それを知つてゐる人でなければ語ることが出来ぬ。私達の乗つた船は朝なぎのした鏡のやうな水のうへを、長閑な櫓の音を高く響かせて滑つていつた。をちこちの島山は宛がら夢を見てゐるかのやうな薄い霞に罩められて、麗かな朝日の影を照り返してゐる海の面は曇つた銀の板のやうに鈍く輝いてゐる。強い海の臭を含んだ爽かな風が習々と顔を撫でた。

船は同じやうな山の鼻や島の影を緩曲りして、次第に廣い海の方へと出ていつた。

屋根板をとつた胴の間には、同勢十人に近い一行の連中が環をつくつて坐りながら、先達の老人の音頭で海の水にも鳴り響くやうな聲を揃へて順禮歌を唄ひ出した。

ふだらくや岸打つ波は三熊野の、那智のお山にひびく瀧津瀬。

ふる里をはるくこゝに紀三井寺、花の都も近くなるらん。

親類の老人といふのは、その頃六十に近い、若い者を凌ぐ矍鑠たる爺さんで、亡くなつた私の父とは二つ三つ年長で、二人は代々重縁の繋つてゐる親戚の間柄とて、若い時からの友達であつた。私達は子供の時から叔父さんをちさんと呼んで、兩方の家に吉凶のある時は云ふまでもなく、佛の信心と酒とが大の好物であつた叔父さんは、お盆の墓まゐりご正

月の年始は必ず缺かしたことがなく、とりわけて佛事供養の折には私の家にとつて、その叔父さんは何人よりも缺かされぬ一のお客なのであつた。若い時に家代々の名主を勤め、廢藩後はまた長く戸長といふものを勤めてゐて、古いことをよく知つてゐた。岡山の名君といはれた備前少將新太郎のことや大石内藏之助の若い時分の逸事なきをよく聞かしてくれた。同行の連中こいふは、そのお爺さん老夫婦に爺さんの妹でおせいさんといつて、薄いあばたのある脊のすらツとした品の好い中婆さん——その人は若い時餘處に嫁いたが、夫がひさしい道樂者であつたので、娘の子を一人連れて戻つてきて分家をしてゐた。その娘はみいさんといつて、私よりは十ぐらゐるも年上の、目鼻だちのいゝ別嬪であつた。私がまだ五つ六つの時分、母につれられて、その家に立寄ると、みいさんが私を負つて家の裏の栗を拾つてくれたことがあつた——これだけが親類の連れ

で、あとはそのお爺さんの村のたれ彼れ、多くは農家の女房達であるが困らぬ人達である。

深緑に晴れ渡つた大空は、丁度瀬戸物の肌のやうに麗かな日光が一ぱいに漲つて、青聲を敷いたやうな海の上は漣さへ起たず、遠くとほく眼のとどく限り白く霞んでゐる。船はその煙霞の中を分けつゝ悲みの籠つたそして長閑な順禮歌の合唱の聲を載せて滑つていつた。

岩を立て、水を湛へて壺坂の、庭のいさごも淨土なるらん。

聴て午近くなると船頭は、十四五の子供に櫓を押さしておいて自分は米を洗つて飯を炊き、晝飯の支度に取りかゝつた。精進の道中とて添へる物は香の物に和布の酢あえくらゐるのものであつたが、いくらか塩加減のある御飯に澤庵の風味、空腹の腹に得もいはれぬ味があつて、湯茶のついた、顔も入りさうな大きな飯茶碗に、手垢に黒ずんだ杉箸で、私は幾杯か

を重ねた。一日も酒がなくてはゐられないその老人は、昨夕船頭に買はして置いた酒を煖めさして、二人で氣長に飲みはじめた。日は頭の眞上から遅ねく照り輝いて、海は一面にちろくと鏡の破片のやうに眩しく光つてゐるが、適度に氣温を冷まされた軟風は、そよくと絶えず頬から襟先のあたりを弄つていつた。

船はまた幾つか同じやうな山の鼻端を曲つて、とある島によつて狭い水道をなしてゐるところまで進んで来ると、折から午過ぎの空氣はすこしづゝ荒だつてきて、さすがに静であつた水のうへに青い細波が揺れてきた。

「ほら向ひ風だ。」啣へ煙管で櫓を押してゐた船頭は日に焼けた顔を上げてゆく手の海の方を見渡し乍らいつた。

「風が出たら仕方がない、仙さん船に弱い連中ばかりですから夜まで待

つてもらはう。明日の朝までに大部に着けてもらへばいゝんぢやから、

急ぐことはないぞな。」老人はさういつて、船頭を勞うた。

水道の彼方には今までに見なかつたやうな廣い青海原が遠く展けて、眞白い波頭が白馬の鬣の如く飛沫を揚げて凄まじく押寄せてゐる。

「えゝ、夜半まで待てば風が變る。」

仙さんはさういひつゝ、ところ／＼に人家の點在してゐる山裾の岸に船を漕ぎ寄せた。山には麥畑が雜段のやうに一枚々々重なつて、下から上までつゞいてゐた。その麥圃の中を半里かばり奥に入つてゆくと、御繁昌なお稻荷様があるといふので、女達は皆船から上つてその方にお詣りにいつた。私は母の誘ふのを聽かずに、水道の向に横はつてゐる島山に上つて見たくてたまらないので、船頭に頼んで船をそちらの岸に着けてもらひ、一人雜木の繁茂を掻きわけてその島のうへにと登つていつた。

島は以前このわたりの土地を領してゐた家老の墓地のあつた處であつたが、今は墓守りさへ住まず、藪叢の荒れるにまかした、全く無人の島となつてゐる。私は八重葎の草をわけて墓碑のある方に深く進んでゆくと、ところ／＼に海風に採まれた老松が高く翠蓋が翳してゐて、大きな碑石はその下に春の小草に埋れたまゝ立つてゐるのを發見した。私は黒く苔蒸した花崗石のその臺石に腰を打ちかけて憩ひ、島の彼方に遠く開けた瀬戸内海の水を遙に見渡した。志す小豆島はその水の彼方に白く霞を籠めて青螺の如く淡く横はつてゐるのが、それである。脚の下から白銀を延べた様に續いた海原には絨の如き煙霞が一面に漂うて、暁き日の光は天地の端から端迄残る限なく包んでゐるのである。

夜に入るとともに風は次第に風いできた。晝間と同じやうな夕飯が済むと、また老人の先達で一と仕切り御詠歌の合誦が始まつた。

私は昨夕の睡眠不足に早くも睡氣を催して船の胴の間から、ずつと奥の方の舳の處に這入つていつて窮屈な體を横へて睡を貪つた。胴の間の順禮歌もいつしか止んで、暫く念佛を唱へる聲がしてゐるが、それも終つて了ふと、跡は船頭の仙さんが櫓を操り乍ら若い女房達に腹を抱へて笑はす様な大口をきいて賑かにさゞめいてゐる音が聞えてゐた。

船は好い塩梅に順風に乗じてもう餘程沖に漕ぎ出でたと思はれて舳の棧を枕に横になつてゐると、船底に、びちりびちりと水の弄る音が響いてゐる。そのうちに胴の間のさゞめきも靜つて、女房達も銘々身を横へるだけの場處を見附けて、寢に就くやうであつた。

すると晝間から、船頭の仙さんが、女房達を對手に大口をきいてゐる時に、

「こゝにゐる中ちやお前が一番別嬪だ。」と老人と二人で、十二分に過し

船大工の植の
音の長閑にき
こえてくるあ
たり、一文の
結末として殊
に趣が深いの
である。

酒の嫌で船頭が戯けてゐた。二十七八の丸髷に結び、齒を染めた女房の一人が、寝るところを探しながら、

「そちらの方に寝るところがありますか。」といひながら、幾つにも仕切られた横板を踏越して、私が一人横になつてゐる舳の奥に這入つてきた。

「おゝ、此處は好いところがある。」と、ひとり言をいつてゐる

「寝るところはありますよ。」といひながら、私は仕方なく狭苦しいのを耐へて身を横に縮めた。

「どうぞすこし入れさして下さいまし。」といひつゝ、女房は頭を向にして横になつた。着物をきたまゝ脚と脚とが互ひに觸れあつてゐる。婦人の體の暖まりや頭のものゝ異様な臭なさが、その頃まだ十分に女性といふものを解さない私の官覺を、むづぐゝさせるやうに刺戟した。私は折角心地よく安かにこの一夜を寝て明かさうと思つてゐたのに、女房が入つて

きたゝめに氣が惱ましく、胸の動悸が昂まつてきた。

それでもいつしかぐつすり寝入つてしまつて、そして今度心地よく眼を覺ました時には、艦の方では船頭の太い濁聲が朝ほらけの海風に響いてゐるのが聞えた。

女房もやつと眼を覺まして、やう／＼坐つて頭の支へぬくらゐの低い屋根の下に起直りながら、二つ三つ續け横に大きな欠伸をしてそれから寢亂れた後毛を掻きあけて、私に會釋をしながら艦の方に仕切板を踏み越して出ていつた。

私もつゞいて起きていつた。そして屋根を取つた船縁から、ついと顔を出してみると、眼の前にはいつの間にか陸地が現はれてゐて、船は小豆島に着いたのである。潮に濡めつた沙地の渚には透きとほるやうな清かな水が、のたりのたりと、靜に小さい波を寄せて、磯臭い、爽な風が冷

この一篇は殊に趣味の深い、さうして歴史的背景をもつた紀行文の傑作である

吉野路

たく襟首を吹いた。弓のやうに遠く延びた海岸につゞく漁村のところどころに大きな木組みをして船を造つてゐる方から、木を叩く槌の音が、かんくんと、長閑に、静な朝の空氣に響いてゐた。(七年四月六日)

年月心にかけてながらまだ果たすおりのなかつた吉野を観るつもりで、ひとり京都の宿を立ちいでたのは、花の季節はもう夙に過ぎて、野にも山にもたゞ眼の覚めるやうな美しい新緑の色が日にひに濃くなつてゆく五月の初であつた。

七條の停車場から汽車に乗つて洛南の郊外に出ると、まだ曉の夢から覚めきれないやうな鳥羽野の麥圃は、遠く五月晴れの煙霞の立罩めた中には、てしもなく開けて、おちこちの人家や籬落を繞つてゐる菜畑には、もう黄白の花がすこし末枯かけて、朝露に濡れながら敢米ない幻のやうに薄ら寂しく咲きおかれてゐる。すぐ眼近に見えてゐる東寺の五重の塔を模糊とした朝霧の棚曳く中に車窓から振嵐りながら私は座席に落着いて、バスケットの中から折りたゝんだ地圖なごを取出して披きながら、多年の宿望を果たす今日の悦びを感じつゝ、静に探勝の氣分に浸つてゐた。伏見を通り越して桃山、木幡も過ぎ、宇治まで来ると、そこでボギー車の向うの端に北斗町か宮川町あたりと見える藝者や舞妓をつれてゐた騒々しい一連の客をはじめ、大抵の客は降ってしまった。私は一昨年の丁度今時分半月ばかりも滞在してゐた宇治川の畔の情趣に富んだ花屋敷の生みな

どを懐しく想ひ浮べてゐるうちに、汽車は深い竹籬や茶畑の間を過て駛
 せた。やがて奈良平野の西の空に生駒の鬚鬚を望むところまで來てゐる
 と思ふ間に、もう土佐派の繪に見るやうな眞青な嫩草山、それにつゞいて
 蒼蔚とした春日山などが車窓に映じてきた。大佛殿の大きな屋根の頂に
 輝く鴟尾が眼を射た。私は丁度まる三年ばかり見なかつた一等の觀景を
 懐かしみつゝ熱心に窓々に眼を放つてゐる間に汽車は奈良に來て停車し
 た。南大和にゆくには、そこから櫻井ゆきの線路に乘換へねばならぬ。
 三十分ばかりプラットフォームに待つてゐるうちに高田、櫻井など大和
 平野の市邑を聯絡して奈良と王寺との間を往復してゐる輕便鐵道の汽車
 のやうな小さい列車が入つてきた。

列車は大和平野の東端を眞南に櫻井に向つて駛せてゆくのである。右
 窓からは際涯もなく潤けた麥圃や桑の葉波の彼方に葛城、金剛の雄大な

車窓によつて
 元祿の詩聖近
 松が空想は遂
 にそれを實在
 化せしむと説
 く、異色ある
 文字である。

山容が、遠く五月の陽光の中に白く霞んで見えてゐる。左方は春日山につ
 づく岩向山、初瀬、三輪などの笠置山脈の連山が列車の進行につれてバ
 ノラマの如く展してくる。私は奈良から乗り台はしたこの地方の老紳
 士に大和名所を巡覽する道順などについて訊いてゐる間にいつか京終、
 丹波市などの停車を四つ五つ過ぎて三輪の驛に着いた。近松の「戀飛
 脚大和往來」で名高い三輪の茶屋は、畢竟作の虚構にしる詩人の空想は
 遂にそれを實化せしめてゐるのである。老紳士は私のためにその三輪
 の茶屋のへも尙ほ現存することや、三輪山を神殿とする幣大社大神神
 社などについて語つて聞かせた。私は車窓から顔を覗けて元祿の詩聖が
 空想の舞臺になつた其等の山や野を眺めた。「梅川が風俗の人の目だつ
 を包みかね、借駕籠に日を送り。奈良の旅籠屋三輪の茶屋、五日三日夜
 を明し、二十日餘りに四十兩、遣よして二分残る。鐘も霞むや初瀬山」

といつてゐる、近松のこの文章を読んで私は幾年の久しき、この地方の野山を夢想して懐かしんでゐたか知れない。その三輪の茶屋も初瀬山も今面に見てゐるのである。さうおもつて、私は其等の山野が與へる刹那の印を最も藝術的に感入れやうとした。老紳士はやがて三輪町長といふ名をくれておいて車から降りていつた。私はあとにたゞ一人、狭い車室内を右の窓から眺めたり、左の窓から覗いたり願望低徊終らぬうちに列車はまた動きはじめた。間もなく此度は櫻井に来て停車した。

初瀬の觀音に參るには、そこから初瀬輕便鐵道が通ふてゐる。私は小さいバスケット一つ提げて改札口からすぐつゞいてゐるその方の乗場について車室の中に腰をおろした。小さい列車は三輪山、卷向山から初瀬山につゞく一帯の山脈の、先刻汽車から眺めたとは丁度反對になつてゐる裏側の浅い峡谷の間に開けた田圃の中を駛せていつた。やがて四十分ばかりし

て初瀬につくと、そこからまた俤で先刻の老紳士が教へてくれた初瀬町のとある旅籠屋へと命じた、旅籠屋はかういふ田舎によくあるとほりの、料理屋を兼ねてゐる家で、多勢の怪しげな女が顔を醜く塗つて參詣の客を呼んでゐた。

「まあお休み、まあお入り。」

といふ聲が寺前の往來を、兩側から呼び交はしてゐた。

鯛のおつくりや同じ魚の吸物で晝飯を認めてゐるうちに、晩春初夏の候にありがちの蒸暑かつた空から、絹糸のやうな柔かい雨がしとく／＼こ降ってきた。飯を済ますとすぐ蝙蝠傘をさしてだら／＼登の町を歩いてお寺に參詣した。寺は初瀬山の南腹に在つて、新義真言宗豊山派の總本山。天正天皇の勅願で、道明上人の開基。今は丁度牡丹の季なので近在近郷からの參詣はいふに及ばず大阪あたりから交通の便を利用して遊散

半分の賽者引きもきらず、百八間の長い廊下を私はその多勢の善男善女に交つて高い石礎を踏みつゝ上つていつた。廊下は下が一番長く、中が短く、上が又やゝ長く三折になつてゐて、その兩側には紅白の牡丹の大輪が恰も満開である。廊殿の軒には所々にさまざまの古風の形をした鐵燈籠が釣してある。廊下の曲り角の處では、中の御詠歌を誦する聲が高らかに響いてゐる。私は何となく、古い昔の、信仰心の篤い素朴な衆生が、佛教の恩澤に遍く照らされてゐた時代に身を置いてゐるやうな感じがして、そぞろに涙ぐまれてきた。やがて上り詰めると、そこに觀音堂がある。構造は京都清水の觀音堂に似て、堂前に小さい舞臺がある。本尊は聖武天皇の朝徳道上人の作にかゝり、十一面觀世音、二丈六の立像で、寺傳によると鎌倉長谷の觀音と一木兩體で、これは本木、あちらは末木で刻まれ、願王徳道上人巨木を得て二體の觀音を作り、一つを大和長谷に安置し、

一體は有縁の地に衆生を化せんがために尊像を海中に投じた。後十六年を経てそれが相模國三浦郡の海岸に漂着した。ち勅命によつて一寺を鎌倉長谷に建立し、徳を開山としたといふことである。内陣を拜觀すると、なるほご幽暗い御堂の中には燦爛眼を射るばかりの金色を、つ巨體の尊像がわけもなく尊く拜ませられる。やがて内陣を出てお堂の背後の出口から後庭を歩いてまた舞臺の上立ちつゝ私は多年の願望であつた觀音を拜した喜悅の情の胸に溢るゝ思ひを拵きながら、尙ほ行程を急ぐので、寺前の店屋で繪葉書などを書いて、もとの停車場へといそいだ。

櫻井から眞南に二里ばかりゆくと多武峰談山神社がある。そこは藤原鎌足公を祀つた別格宮幣社で、社殿壯麗、關西の日光ときいてゐるから、私は、これからそこへ參らうか、それとも畝傍の神武天皇御陵、檀神宮なぎを拜觀して、ごちらとも今夜は中に一泊して、明日早く吉野にゆか

うか、それとも、もう何處へも寄らず、これから直ぐ吉野にのけば七か八時までには向に着く。尙ほゆきたいところをいへば、初瀬からまだ四里ばかり山奥に入ると室生寺の古刹がある。紀州の高野山と同じく弘法大師の開基にかゝり、俗に女人高野といはれる塵外の一清境で、高野山が女人禁制であつたのに反し、こちらはその禁法がなかつた。國寶や特別保護建造物が多くあつて、先刻初瀬の町で買った繪葉書には何人にも一見すぐ注意を惹くやうな、苟も古美術の趣味ある者には恍惚たらしめるやうな、優秀端麗なる地藏尊や觀世音の彫像がある。私はその繪葉書を眺めて、いつそ初瀬からすぐそこへ入つてゆかうかとも思つたのであるが、今度の旅程には豫定してゐなかつたので、この秋まで割愛して延ばすことにした。そして私は其等の端美なる繪葉書を大にバスケットのの中に收めて持つてゐるのである。早くその大和の國の山奥に秋が来て、満山の

木々が紅葉するのを待つて、そこにゆきたい。

多武峰も春は櫻に秋は紅葉の名所ときいてゐる。室生寺も秋まで延ばしたから、こゝもその時まで楽しみにとつておくことにしやう。さう思ひ定めて私は櫻井から今度は畝傍御陵にも橿原神宮にも寄らずに、其等は汽車の窓から遠く拜しながら、ずつと吉野までゆくことに決心した。待つ間ほどなく奈良から王寺ゆきの列車が來たので私はまたそれに乗た。今まで奈良から真南に向つて駛せてきた車道は櫻井を基點として右折し、真直に西に向つて大和平野の中心を貫いて駛せてゆくのである。右窓からは大和三山の耳無山、左窓からは天香山、畝傍山が麥圃の間に見えるてきた。藍色の坐席に腰掛けながら、先刻櫻井の停車場で買った大和一圓の地圖を披いて見てゐると、梅川忠兵衛の詩劇で馴染の新口村といふのは丁度その耳無山の西麓にあることを見つけた。それも前にいつたとほ

詩聖近松が精神を道破せる稀有の文字である。

り作者の虚構に過ぎないのであるが、私は車窓から熟々、麥畑に青い波を揚げてゐる野面を眺めながら如何にしてこの土地が元祿の當時の詩人の印象に留まつて藝術の構想に攝取られたかといふことをもう一遍考へてみないではゐられなかつた。そして現實を美化する詩人の空想の力の豊富なることを今更讃嘆せずにはゐられなかつた。けれども近松は絶大の空想力によつて現實を美化したとにも、その半面やつぱり現實を十分よく捉んでゐることを私は看取した。今の世にはもう梅川や忠兵衛のごとき耽美的な殉情的な性格はゐないかも知れぬ。少くとも殉情耽美の人間はあつても、彼等のごとく純であるわけにはゆかない。けれども、あの詩劇の副へに出て来る副人物新口村の百姓忠三郎、その擧のごとき現實性を備へた人間はきつと今もこのあたりの土地にゐるであらう。新口村のあるあたりは大和平野の中心であつて、農家の最も盛な處

である。元祿の詩人はそこを見た。忠兵衛の親里を新口村に假構したのは、このあたりが大和の代表的の百姓ごころであるからだ。そんなことを思ひながら昔の作者の用意のあることなどを考へて、雁次郎や福助によつて演出せらるゝあの美しい詩劇の一齣に凝乎と空想を馳せてゐる間に汽車は香具山、畝傍の驛々を、いつの間にか通り過ぎて王寺和歌山線の高田驛に着いた。そこでまた乗換をしなければならぬ。私はバスケットと傘とを携へてプラットホームの向側に停車してゐる小さい車室に入つていつた。それは今まで乗つてきた、奈良から櫻井を経て王寺を聯絡してゐる列車よりもなほいぶせく思はれる車室である。そのうへに先刻から南風が吹いてひどく蒸暑くなつてきた。車窓から見ると遠く奈良、郡山の方までも展けた野の末は白く霞を罩めて煙り、沿道の麥圃には見わたすかぎり緑の波を打たしてゐる。先刻から通つてきた巻向、三輪、

初瀬の峯巒は漸々遠ざかるにつれて淡藍色に薄れゆき、香具、耳無の碧燕も次第に大麥小麥の波に隠れて三山の中最も近く、その形の最も大きい畝傍のみは野末の煙霞の中に緋碧の霞をかためたるごとく立つてゐる。少しく瞳を左方にずると、遠く平野の西北隅を劃してゐる牛駒山の圓かな輪廓は雲煙の界に夢のごとく淡く描かれてゐる。さうして車道が大和平野の西南隅を漸次南に駛せてゆくにつれて、このあたりの汽車にはじめて乗つてゐる私はあまりにいつまでも今まで経て来た方ばかりを回顧してゐる間に、右方の車窓に思ひもがけない翠巒の眼近く迫つてゐることを発見した。それは二上山から葛城、金剛の諸山につゞいてゐる一帯の山脈である。

私は嘗て近江と美濃との境に峙つ伊吹山を少年時代から懐かしい山の一つに數へたことがあつたが、金剛山はそれにも優りて私の少年時代の純真なる思想を飾つた山なのであつた。南朝の忠臣楠正成の史譚を受讀して措かなかつた私はこの金剛山の名を牽記して到底忘れることが出来ないのである。こゝに城を築いて據つた正成が寡兵を以つて、雲霞のごとく押し寄せて来る北條、足利の大軍に抗し、神策奇籌を用ひて其等の賊軍を鏖殺した忠勇武烈なる物譚は日本略史や日本外史の愛讀者たる私の純真な胸をいかに躍らしめたことであつたらう。頼山陽も櫻井の驛から南の方遙に金剛山の巍峩たる姿を眺めて楠氏父子の忠誠を思ふといつてゐるが、少年時代にその文章を愛誦した私は心に楠氏を離れてこの山を仰ぐことが出来ないのである。そして楠氏のことを追懐すれば自から金剛山のことが思ひ浮んでくる。楠氏の忠誠といふことは、爾來人間の倫思想の幾變遷した今日にあつては、これを五百年以前の當時のまゝに適用することは或は無理であるかも知れぬが、その飽くまでも信念の

厚い、點塵の濁りを留めざる殉難的の行爲は、依然として永久に倫理思想の最高峰に立つて具象的標證となつてゐるのである。私は少年時代の愛讀の書に日本外史をし、その時代の眞なる私の稚い思想を飾るべく楠氏の忠誠なる傳奇的な物譚と雲表に聳ゆる金剛山とをいつてゐたことを幸福に感ずるのである。

その金剛山は、今ゆく手の空に高く聳えてゐる。今は私の思想も移り、時代の思想も變遷した。従つて少年時代と同じやうな感涙の心をもつてこの山を仰ぐことは出来ないのであるが、かくの如く日本歴史中の精華によつて裝飾せられたる山は、それをたゞ普通の山を見る時と同じやうに、何等の聯想なしに仰き眺めることは出来なかつた。

私は地圖を披いて、尙ほ委しく附近の地理を點檢しながら、車窓一ぱいになつて入つてくる峰巒を飽かず眺め入つてゐた。二上山は大和川の峽

谷によつて生駒山脈と葛城山脈とが大和平野の西端に添ふて南北に兩斷せられてゐる、その南半の葛城山脈の北端を成して、突兀たる峯の中ほどが扶つたやうに遙に二つに分れて見えてゐるのが、それである。そしてその中腹の窪いところが竹内峠で、昔時大和の中部地方と、大阪を聯絡する通筋に當つてゐたのである。私は其突兀たる山容を望見しながら、また「戀飛脚」のことを思ひ浮べた。「あの葛城の神ならで、晝の通路つゝましく、身を忍ぶ道戀の道、我れから狭き浮世の道、竹の内峠袖濡れて、岩屋越とて石道や、野越え山暮れ里々越えて、行くは戀ゆる……」といふのが、あの竹内峠である。近松がこの地方の自然を詩に詠じてゐることが繰返して偲ばれた。私の懐憶にも構はず、汽車が南に駛せるとともにその二上山も段々後の方に遠ざかつていつた。長い晩春の日は、漸次西に傾きそめた。屏々たる一帶の翠微は山背に夕暎を浴びて金粉を蒔いたやうに

眩しく煙つてゐる。そして山の頂が後光を背負つたやうに明るく輝いてゐるのに反して、中腹から麓の方は青緑の膚、藍の蔭一際鮮かで、その處々に點在してゐる人家から、紫の炊煙が靜に立ちのほりながら、未は中腹の晚霞の中に溶けてゐる。見渡す限り新緑の色に彩られた野も山も、今白金のとき暮靄に罩められたるまゝ、靜に夜の幕の下りるのを待つてゐるやうである。

私は車窓の右を眺めたり、左を覗いたり、はじめて見るこの窓外の風景に頭が一洗せられたやうに清新な気分になつて、却つて心が落着かないくらゐであつた。やがて五所の町を過ぎれば次驛が壱阪、淨瑠璃で熟知の壱阪等はそこから東一里半の山の中にある。私はそこにも憧憬を残しつゝ尚ほ南へと進ばれていつた。そして車道は漸次深い峽谷の中に分けて入つた。午から曇つてゐた空は暮に近づくとも一層暗黒に掻き

曇つて、左右の翠巒を風が吹き揺つてゐる。私はその間に暫く落着いた愉快な気分になつて先刻初瀬の觀音で買つた繪葉書を郷里の母や、東京の一二の知人にあてゝ書いた。今から十年ばかり前に西國三十三箇所を順禮してこのあたりを通つた老母の思ひ出のために。

吉野口の停車場に來た時にはもう深い山の中は寂しく暮れかけてゐた。そこから吉野川畔の六田まで通じてゐる吉野輕便鐵道の汽車がもうプラットフォームの向側に來て待つてゐた。列車は更らに窮屈な山の間を分けて喘ぎあえぎ上つていつた。私は地圖を點檢しながら車道が少しも早く吉野川の溪谷に出ることを待ちわびてゐた。吉野川！私は、今日車窓の左右に眺めて來た初めて見る諸方の山や野にも劣らぬ熱度をもつてどんなに長い間この川に憧憬してゐたであらう。吉野朝廷に關聯する正史ばかりでなく、々の夢幻劇によつて、此川が古來どんなに美化されて

るるか。「千本櫻」の維盛卿とすし屋の娘お里との傳奇的情話もこの一と條の清流の畔に因縁しており。「妹背山婦女庭訓」の大時代的裝飾劇もこの川を舞臺としてゐる。私の美的幻影の中には、この川がいつも芝居の背景に描かれた青い山と山との間を流れてゐるあの美しい川ミのみ映つてゐるのであつた。私は朝から乗降の頻繁な一日の車行に大分疲れてきたので、一刻も早くその幻のごとく腦裏に映つてゐる川の畔に出たかつた。やがて稍々長いトンネルを一つ向うへ通り抜けて谷が變ると、まだ河身は見えぬが山谷の形勢がどこかそこ等に河流の通じてゐることを示してゐる。汽車はある山麓に添ふて走り、鑛道の崖下に狭い田圃が開けてゐるところへ、家が二三軒立つてゐて、その一軒の家の背戸に楓がまゐるで躑躅のやうに眞紅に燃てゐるその村里のあなたに、一帯の低地が新緑の底に埋れて見えるのが吉野川の沓筋であらう。そんなことを思つて

ゐるうちに汽車は稍々山谷の開けた平地に出てきた。そして、とある停車場に到着した。そこが吉野川の畔の古い下市の町のある下市口であつた。汽車が停車場にさしかゝる少し手前から吉野川に架した大きな板橋が向ふに見えてゐる。昔から此の橋の上を一日に米穀が千石通るさいふので千石橋と名づけられてゐる。下市口からその板橋を向ふに渡ると下市の町で、さうした山の中にはめづらしい白壁や大きな瓦の屋根なごが新緑の間から見えてゐる。「義經千本櫻」によつて事實化された釣瓶鮎を賣る鮎屋彌山といふ店があつて、釣瓶形の容に入れた鮎鮎を賣つてゐる。「……立歸る春は來ねごも花咲かす娘が漬けた鮎ならば、なれが宜かろご買ひに來る。風味も吉野下市に、賣り弘めたる所の名物、釣瓶鮎屋の彌左衛門、留守の内にも産賣に振目も内儀が早漬に、娘のお里が肩綿襷、裾に前垂ほやくと、愛に愛もつ鮎の鮎押へてしめてなれさす

る、味盛りの振袖が、釣瓶鮎とは物らしよ。……」

私はその文辭を思ひ起して、浪華の淨瑠璃作者によつてボビュラアになつた、このあたりの風景を飽かず眺めてゐた。プラットフォームには大きな杉の丸太や板などが山のやうに堆積されて、周囲の山はごちらを向いても美しい杉の林に被はれてゐる。吉野の奥の大峯山に登るには此處から洞川といふところへ出てゆくのが一番順路である。途程中官幣大社丹生川上神社は下市から二里南にいつた黒瀧村に在る。十津川に沿ふて遠く紀州の熊野の方に越してゆくのもこの下市を経てゆくの順路になつてゐる。私は、それらの方にあたる深い山を眺て、私にはまだ未知の世界なるその地方にいつかは入つていつて見ようといふ憧憬に胸を躍らしてゐた。下市を過ぎると、やがて吉野川の流れが右窓の眺めに入つてくる。けれどもそのあたりは極めて流れが淺くて狭い。そこか

ら六田の終點はもうぢきである。

そこは深い山の中の停車場にしては、流石に吉野遊覽の客が乗降するのと、吉野材木の集散地になつて、ゐるほごあつて、思つたよりも構内の広い停車場である。プラットフォームなども長くつゞいてゐて、寂しい夕暮れであるにもかゝはらず汽車を降りてそのプラットフォームを改札口の方に歩いてゆきながら、さういふ場合に屢々襲ふて來る旅情の寂しさも今日は不思議に湧いて起らない。もう觀櫻の季節は疾に過ぎてゐるので、芳野にゆぐらしい旅客も降りたやうにはなく、改札口を向うに出ぬけると、外にはそれでも車夫が十人ばかり客待ちをしてゐる。

車夫は、これから夜道をかけて二里の山阪を登つてゆかねばならぬのだからと仰山さうに、さうしても二人びきでなければゆかないといふ。俵はやがて先びきをつけて走つた、そこらには強い香の漂ふ吉野杉の

製材が高く積み重ねられてゐるのが暮色の中に白く見えてゐたり、盛に木材を扱つて製板所の機械の音の響いてゐるのも何となく吉野の奥まで入つて来たといふ心地をさせる。車は坦々たる大道をすこしいつてから右に折れて、吉野川の廣い河原におりて板橋のうへを馳せた。私はこゝまで来て早く見たいと思つてゐた吉野川を、直に見ることができた。礮は晩靄の底に微白く暮れやうとして、黄緑色の瀬から爽かな風が襟を吹いてきた。こゝは今は六田の渡しといつてゐるが、昔は柳のしといひ、川の畔に柳の古木があつたところで、こゝから半里ばかり上流の上市の渡しを櫻の渡しといつてゐたのだといふやうなことを車夫は話しながらゆく。汽車などのまだ通はない、ずつと往昔は、京都あたりから吉野に来る者は櫻井から多武峯を経て、山越しに龍在峠、雲井の茶屋を通つて上ちに出で、それから櫻の渡しを向うに渡したのである。飛鳥井雅章が「たつ

ね来てこゝも櫻の峰つゞき吉野初瀬は花の中宿」といつてゐる通路が私には懐かしく追想された。私はいつか一度は花の咲いてゐる頃徒歩してその道を通つて来てみたいものだと思ひながら、すぐ川上の方を眺めると、そこには鐵橋の架設工事が大半出来上つてゐる。吉野はますます便利になり俗悪になることであらう。やがて俥は板橋を向ふにわたり、吉野川の南岸に沿つた六田の町を通りぬけて一の坂を登つてゆく。

吉野は、吉野連峰の北端なる金峯山が長く吉野川の溪谷まで尾を引いてゐる、その尾根に據つてゐるのである。東海、東山、北陸諸に比べて、近畿から山陽、山陰にかけては、仰いで崇高の感を起さしめるやうな高山雄峯に乏しいが、その中で此の吉野連山は意外に高い山嶺を成してゐる。大和は一市十郡であるが、國の半分以上の面積を占めてゐる吉野一郡は、おのの奈良市と爾餘の九郡とが、國の中央より稍北によつたこ

ころを流るゝ吉野川によつて、ま一つに横断されてゐる。そして國の北半
 が四面青山垣を環してゐるけのない國であるにかゝはらず、中央に平
 野が開けて、美山が穰つてゐるのは、が皇祖が二千六百年の昔此の國土
 に宮居を奠めましたここに地勢上の深い道理があると思はれる。
 昔の事を考へると我が帝國が今日の大を成した、實に國家の靈地
 である。吉野は一國の大半を占めてゐる大きな郡で、その郡が殆ど山
 ばかりで、悉く美しい杉檜の森林によつて被はれてゐるのも氣持ちがい
 い。私はさういふ美林を、に座敷といふ側からのみ考量したくない。日
 本の風景美として鑑賞したのである。それ草木花卉悉く美ならざるは
 ないが就中常盤樹、針葉樹の緑の美ほゞ眺め飽かぬはない。杉や檜が古
 來どんなに藝術家によつて嘆美されてゐるか、名匠狩野元信をして鈴鹿
 山中の杉を見て、到底わが筆の及ばざるを歎じて繪筆を棄てしめたとい

ふ傳を思つてみても分るのである。畫家でない私は、自分が夫を藝術に
 することが出来ぬのを悲む。而て元信と同じやうに杉を見て其美に恍惚
 としたとは度々ある。日光の東照宮山内の杉もさうであつた。日光の湯
 の湖の畔をめぐつてゐる杉も美しい。箱根の蘆の湖畔の舊東海道に残つ
 てゐる八町の杉も美しい。私はさういふ美しい杉の美林が、この吉
 野の郡から紀伊の國にまで遠く連亘してゐる連峯を被ふてゐるを考へ
 ると、そこには言語に表はしがたい天然の美が深く秘藏されてゐるの
 が何ともいへず心持がいゝのである。そして我等の吉野連峯が、いづれも相
 應な高標を示してゐる。ここにも私には愉快である。最高峯は佛經ヶ岳で六
 千二百尺といふから、丁度關東では赤城山くらゐの山である。それが全郡
 に蟠屈して紀州の方までつゞいてゐるから山は随分奥深い。吉野はその
 青疊の山の丁度入口のやうな處に位してゐるのである。